

---

# 銀河英雄伝説～ラインハルトに負けません

三田弾正

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

銀河英雄伝説〜ラインハルトに負けません

### 【Nコード】

N3863X

### 【作者名】

三田弾正

### 【あらすじ】

銀河英雄伝説〜門閥貴族・・・だが貧乏！

執筆前に、元々このネタで行こうと、考えていた物です。

幻の皇后、シュザンナ・フォン・バーネミュンデ侯爵夫人の子供の一人に転生し、これから来る破滅を何とか、避けようとする、皇女の物語です。

この小説は「らいとすたっフルール2004」にしたがって作成されています。

**第一話 お母様は、シュザンナ(前書き)**

劇中の暗殺者は、CV真柴摩利 (シーマ・ガラハウ)さんのイメ  
ージです。

## 第一話 お母様は、シユザンナ

……暗い……それと暖かい？

耳に入るのは、ドイツ語らしい女性の声で、『私の可愛いベビー、今度こそ無事に生まれてきておくれ』

んん！

体が流れるー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！？

眩しい此処はどこだ？？

『お生まれになりました、お美しい皇女様です』  
誰かが言う声が聞こえる。

薄目を開けて見てみると、レトロな看護服を着た、女性が喋っている。

なるほど、さっきのは母親の胎内ですか。今は産まれた所のようにです。

母らしき人が、『おお、私の可愛いベビー、今度こそ守りますか  
らね』

看護婦が、『侯爵夫人様、皇女様のお体を、清浄して参ります』  
そう言っつて、私を連れて別室へと移動しました。

看護婦が、体を拭きながら、恐ろしいことを、言い始めました。  
『フツ・・チヨロいもんだね、あんたに恨みはないが、生まれる  
ところを間違えたのさ、自分の生まれの不幸を、呪うがいい』

うわああああ、シヤアの台詞じゃあるまいし、目つき変わってる



耳に聞こえるのは、『宮中警備隊を、呼べ』とか『侯爵夫人と皇女様を別室へ』とか、『背後関係を探れ』とかが聞こえてきます。

そのまま、別室で、清浄され、母親に抱かれて、病院らしき所から、彼女の家らしき、邸宅へ連れて行かれて、邸宅内の、赤ちゃんを入れるプラ製箱に、入れられました。

しかし、いきなり暗殺されそうになるとは、私はいったい誰なんだ？

侯爵夫人とか皇女様とか宮中警備隊とか、現代じゃ聞き慣れない言葉だし。

侯爵夫人が、母親らしい。  
皇女が私。

で宮中警備隊があると、どっかの王宮かな？

疲れたんで、少し寝よう。

ん、ガヤガヤする、また暗殺か？

ホッ、母親が、立ち上がったのか、ん？

『皇帝陛下のお成りでございます』

誰かがそう言っている。

皇帝陛下????

『シユザンナ、無事か』

『陛下』

『おお、この子が、予の子か』

『陛下そつでございます』

『おお、シユザンナに似て憂い子じゃ』

『陛下、危ういところでした』

『聞いておる、大事に育てるのじゃ』

『警備も強化させよう、ようがんばった』

『陛下』

『今宵は、親子三人で過ごそうぞ』

『陛下』

意識が薄れていった……ZZZZZ

一ヶ月ほどたって、私の、立ち位置が判明しました。

こんにちは、私は、テレゼ・フォン・ゴールデンバウムと申します。

ゴールデンバウム王朝第36代皇帝フリードリヒ4世 と寵姫シュザンナ・フォン・ベーネミュンデ侯爵夫人との間に生まれた、第3皇女です。

大きな声では言えないのですが、実は私、転生者なんです。

ゴールデンバウム王朝と言えば、銀河英雄伝説の世界ですよ。

第36代皇帝フリードリヒ4世と言えば、ラインハルトの、篡奪を知りながら、あえてそのままにした、あの皇帝ですよ。

シュザンナ・フォン・ベーネミュンデ侯爵夫人と言えば、子供4人ぐらい殺されて、アンネローゼに嫉妬して、フレーゲル男爵に、そそのかされて、暗殺狙って失敗して、死んだ人じゃないですか。

私も暗殺されかけたし、これからも、危険がいつぱい。

今年って何年なんだろう、喋れないし、字も書けないから、どうにもならないよ。

食っちゃ寝、食っちゃ寝を繰り返すこと、2年で、やっと、喋れるようになり、ムッター、ファーターと言うようになり、シュザンナ

母様と、フリードリヒ父様が、目を細めて、喜んでくれた。

どうも警備が完璧なのと、女だから、帝位に関係ないから、敵からは放置され始めたみたいなき感じ。

ノイエ・サンスーシだからか、カレンダーとか無いし、年度が判らない、困った。

つたない言葉で「お母様、私の、お誕生日は、何年なの」って聞いたら。

『テレゼ、難しい言葉を、覚えたのですね』

にこやかに、話してくれました。

『あなたのお誕生日は、471年2月3日生まれですよ』

「お母様、ありがとうございます」

女官が来て、『テレゼ様、お昼寝の時間でございます』

と来て、ベットへ寝かされました。

考えようとしたけど、寝てしまいました。

翌日から、これからの人生について考え始めた。

ん、お父様が487年に亡くなられるから、そのとき、16歳か、ラインハルトが、クーデター起こすのが、488年だから、17歳、

お母様が、フレーゲルにそのかされるのが、486年で15歳、お母様が、暗殺未遂したら、私もとばちり食うかも知れない。

それで生き残っても、アンネローゼを狙った女の娘じゃ、酷い目に遭いそうな気が。

それで、無事でも、リップシュタットの後に、あのランズベルク伯に我が儘小僧と共に、誘拐されるかも知れない。

路頭に迷うのはいやだ。

アンネローゼが後宮に来るのが477年ぐらいだから、あと4年

か、6歳に時に、父上に甘えまくって、アンネローゼが来るのを、  
阻止できれば、安全だ。  
よっし、それで行こう。

**第一話 お母様は、シユザンナ（後書き）**

いつか、続きを書きたいです。

## 第二話 韜晦作戦準備よし（前書き）

お待たせしました、少ないですが第二話です。

## 第二話 韜晦作戦準備よし

帝国歴473年7月10日 13時

オーディン ノイエ・サンスーシ ベーネミュンデ侯爵邸

「テレーゼ私の可愛いテレーゼ、陛下より沢山のドレスが送られて来ましたよ」

「お母様、お父様からですか」

「そうですね、あなたのお父様からのプレゼントですよ」

「わーい、綺麗」

「本当に綺麗ね」

「お母様、着たいですう」

「そうですね、ヘレーネ、クラリッサ、支度をなさい」

「かしこまりました侯爵夫人」

「わーい、わーい」

帝国歴473年7月10日 19時

オーディン ノイエ・サンスーシ ベーネミュンデ侯爵邸 テレ  
ーゼ・フォン・ゴールデンバウム

ふつう、疲れたよ。

お母様ったらノリノリに成っちゃって、あれからお茶の時間を挟んで4時間も着せ替えだもの。

無邪気な2歳児を、演じるのも大変だよ。

相変わらず夕食はドイツ料理だし、たまには梅干しとお茶漬け食べたい。

お米と紅茶はあるから、探せばあるかも。けどお母様が食べるの許

してくれないな。

しかし、私を暗殺しようとした黒幕は誰なんだろう。

470年に、兄様が死産と言うことに、なってるけど暗殺の可能性が大だな。

確か母様は4回妊娠してるから、あと2人生まれるかも知れない。無事に男子が生まれてくれれば皇位継承が拗れないかも知れない。まあ私が生きているから妊娠しない可能性もあるけどどうなるやら。

暗殺の黒幕って、原作じゃ、ブラウンシュヴァイク公とかリッテンハイム候とか言われてるけど、ルードヴィヒ兄様が、生きている限りあの2家に帝位が行くことはないのだから、ルードヴィヒ兄様が、急死する事を知らない訳だから、そんなことをするんだろうか。それとも、ルードヴィヒ兄様の急死事態が、ブラウンシュヴァイク公とかリッテンハイム候とかの、策謀だったとしたら、あり得ることだ。

しかし此処に、私というイレギュラーが、発生したそうになると、最低2人暗殺しないと成らなくなった、図らずもリスク分散が出来る訳か。

こうなると、あまり才気を見せると、敵的になりそうだな。

暗殺から、逃れるためには、注意しつつこれまで道理、無邪気な皇女を演じ続けよう。

韜晦しなければ命が危ないからね。

これこそ韜晦作戦だ。

### 第三話 暗殺の裏幕（前書き）

短いです、すみません。

サブタイトルのに、此処で分けないと駄目だったので。

暗殺者経歴は、お察し下さい。

### 第三話 暗殺の裏幕

オーデイン 某所

「あの女、大言壮語吐いたくせに失敗するとは！」

「手練れの物が居たのでしよう」

「あの者から、こちらの正体が知れることはあるまいな？」

「それは、ご心配無用でございます。」

かの者は叛徒共からの亡命者。ガンダルヴァ星系とかで植民者の反乱に毒ガスを使い住民を虐殺したとか。上層部の命令で暴徒鎮圧用無気力ガスだと、たまされたそうですが上層部がそれを隠すためにかの者達を事故に見せかけて皆殺にした中で唯一逃げてきた者、我々が突き出せば死有のみでございましたからな。生きるためには何でもしましょう」

「フッフどうせ成功しても始末するつもりであったのであろう」

「これは手厳しいすべては閣下の為でございます」

「おぬしには苦労かけるの」

「いえ臣の成すところでございます」

「しかしこれである赤子の周囲に手を出し辛くなった」

「しかし男児ではありませんのでさほど気にする必要はないのでは」

「うむそうじゃな、昨年の赤子は男児であったあのときは見事に死産と言うことになってくれたからの」

「今回の事で、昨年の死産は暗殺だったとの噂が真実味を持ってまことしやかに流れ始めておりますから」

「ここ暫くはおとなしくするのが肝要であろう」

「御意」

**第四話 皇帝即位20周年記念（前書き）**

連続投稿です、お待たせしました。

## 第四話 皇帝即位20周年記念

帝国歴476年2月3日

オーティン ノイエ・サンスーシ「黒真珠の間」

「皇帝陛下、在位20周年、万歳」

「テレーゼ皇女殿下、御生誕5周年、万歳」

「万歳」

「いや、めでたい、お美しい皇女様のご尊顔を拝謁出来ましたな」

「皇帝陛下もまだまだお若い」

「テレーゼ様の初お目見え、楽しみでしたからの」

「僅か5歳であの美貌、あと10年もしたら、銀河一の美貌と成りましょう」

「今の内に、誼を結んおこうかの」

「我が家の、嫡男に是非とも降嫁して欲しいものよ」

「なんの、卿の嫡男は17ではないか、遅すぎるわ、それに比べて、我が息は8歳でちょうど釣り合う」

「卿の息子は、卿に似てぶ男だそうじゃの、釣り合わんよ」

「なにを、なにを、我が息子こそふさわしい」

「話が弾んでおるの」

「これは、ブラウンシュヴァイク公」

「テレーゼ様は、お美しいの」

「奥方が、嫉妬しますぞ」

「ははは」

「伯父上」

「おおフレীগエル」

「それではまた」

「ヨヒアムよ。お前、テレーゼ様をどう思う？」

「お美しい、お方ですな」

「どうだ、お前が望むのなら、いずれ陛下に、お頼み申す事も出来るが」

「しかし、あの噂がございましょう、あの女が、首を縦に振るとは思えませんが」

「確かに、あの噂はあるが、わしは知らんぞ」

「しかし、2度続けての降嫁など出来ましようか」

「オトフリート4世陛下の時代には、一人に3度続けての降嫁もあつたぐらいじゃ」

「なるほど」

「お前も、誇り有る、ブラウンシュヴァイクー門の男としての矜持を見せてみよ」

「伯父上」

「考えておくことだ、権門とはそうゆうものだ」

「さてヨヒアムよ共に挨拶に参るぞ」

「おお、このランズベルク伯アルフレッド、皇女殿下に、詩を、献上いたく存じます」

「皇女陛下、我がヒルデスハイム邸に是非とも、行脚いただきたく存じます」

「なんの、我がヘルクスハイマー邸にこそ是非とも、行脚いただきたく存じます」

「これこれ、テレーゼが困っておろう、まだ幼いのじゃ、驚かすでないぞ、ハハハハ」

「皇帝陛下」

「おお、ルードヴィヒよ、おぬしの妹じゃ、可愛かろう」

「はい、可愛ゆうございますな」

「ほれ、テレゼや、兄上じゃ」  
「兄上ですか？」

「うむそうじゃ、兄上のルードヴィヒじゃ」  
「兄上様、こんにちゅあ」

「ああ、こんにちは」

「父様、ごきげんうらわちくって、言つゆ」

「よいよい、まだそこまでは無理じゃろう、のう、ルードヴィヒ」  
「そうでございますね、幼き子に未だ未だ無理がありませんよう」

「ううー」

「どうした、テレゼ？」

「おちっこー！」

「シャーーーーー」

「わあああん」

「陛下お召し物が」

「よいよい、長きにわたり、此処にいたのじゃ、子供には、辛かる  
う、

すまぬが、ルードヴィヒ、着替えて参る、  
暫く、儂の代わりをしていて欲しい」

「判りました、陛下」

「テレゼも疲れたであろう、今日はもう休むのじゃ」

「おとうしゃま、ぐすぐす」

「がやがやがや」

「皇女様が、お漏らしとは」

「未だ5歳じゃしかたあるまい」

「最近、陛下もテレゼ様に会いによくベーネミュンデ侯爵夫人

の所へいくそうじゃ」

「それで、夫人のご機嫌がよいのですな」

「面白いことよ」

「これは、リッテンハイム候」

「先ほど挨拶してきたが、皇女殿下がこの目出たきときに、お漏らしとは、我が家のザビーネは3歳だがその様なことはないぞよ」

「侯爵、不敬ですぞ」

「なんの、酒の上での、戯れ言よホホホホ」

帝国歴476年2月3日 深夜

オーティン 某所

「今宵の宴はいかがでしたか？」

「ふむ、初めて、あの娘にあつたが、挨拶中に、お漏らしをしておつたわ」

「ほう、恥を搔いたわけですな」

「そうよ、舌足らずに、喋っておつた、そのまま、陛下のズボンに漏らしおつた」

「前代未聞ですな」

「あの女が甘やかして居るのだろう、聞いたか、今回着る為に、陛下から、ドレスが1000着も届いたそうだ」

「よいではございませんか、馬鹿な寵姫と、その娘、我が儘に育てただければ、誰も支持しません」

「そうよの、適齢期が来たら、どこその門閥貴族へ、降嫁させるように、お勧めすればよいの」

「さようございます」

「今回の姿を見て、安心したわ、あれは、捨て置いても平気よ、ただ寵姫達に、男児が生まれたら、始末せねばならんがな」

「御意」

**第五話 皇帝即位20周年記念裏側（前書き）**

第四話の主人公側です

## 第五話 皇帝即位20周年記念裏側

帝国歴476年2月3日

オーディン ノイエ・サンスーシ「黒真珠の間」 テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

「皇帝陛下、在位20周年、万歳」

「テレーゼ皇女殿下、御生誕5周年、万歳」

「万歳」

父様と私のお祝いに、帝国中の貴族、廷臣、軍人、そして、令嬢や令息達が、これでもかかって、着飾って、来ている。

贅を尽くして、豪勢すぎるわ、ドンだけ金かけてるのよ。貴族連中が、集まっては、降嫁とか、うちの子にとか、狙われてるのありありですね。

おっ、あれは、ブラウンシュヴァイク公じゃん、リアルに見ると、なんかねー。

一応、義兄になるわけだけど・・・ねー。

誰か近づいていていった、ん？あの髪型、あの顔、未だ若いけど、フリーゲルじゃない？

2人で話し始めたみたい。

ジュースでも飲みますか、演技も疲れるし。

「お父様、おれんじじゅーすが欲しでしゅ」

「誰か、テレーゼに、オレンジジュースを持ってまいれ」

「はっ」

「お父様、ありがとうございます」  
「うむうむ」

うげ、ブラウンシュヴァイク公とフレーゲルがやって来たよ、いやだな。

「皇帝陛下、皇女殿下にはご機嫌麗しく」

「うむ、公爵」

「皇帝陛下、皇女殿下、此処にいますのは、甥のフレーゲル男爵です、どうぞお見知りおきを」

「ヨヒアム・フォン・フレーゲルと申します、皇帝陛下、皇女殿下の御意を得まして、子々孫々の譽といたく存じます」

「そうか、フレーゲルよ、励め」

「御意」

フレーゲルかよ、この頃から、嫌みっぽく感じるな。

また貴族が来た、今度は誰だ？

「皇帝陛下、皇女殿下にはご機嫌麗しく」

「うむ、候爵」

ああ、この髭、リッテンハイム候じゃん

次々に挨拶来るから、かつたるい。

「おお、このランズベルク伯アルフレッド、皇女殿下に、詩を、献上いたく存じます」

うげ、誘拐犯の、えせ詩人じゃん、この頃から、下手な詩を、作ってたのか。

「皇女陛下、我が、ヒルデスハイム邸に是非とも、行脚いただきたく存じます」

自意識過剰の、自己陶醉来たー。

「なんの、我が、ヘルクスハイマー邸にこそ是非とも、行脚いただきたく存じます」

ん、ヘクスハイマーって聞いた気が………あつ、指向性ゼツフル粒子事件と遺伝子欠陥か。

「これこれ、テレゼが、困っておろう、まだ、幼いのじゃ、驚かすでないぞ、ハハハハ」

あつ、考えていて、無口になっていた。

「皇帝陛下」

「おお、ルードヴィヒよ、おぬしの妹じゃ、可愛かろう」

「はい、可愛ゆうございますな」

「ほれ、テレゼや、兄上じゃ」

ルードヴィヒ皇太子か。

「兄上ですか？」

「うむそつじゃ、兄上のルードヴィヒじゃ」

敵を欺くには、まず味方からと言うから、馬鹿をやりませうか。

「兄上様、こんにちゅあ」

「ああ、こんにちは」

「父様、ごきげんうらわちくって、言うの？」

「よいよい、まだそこまでは無理じゃろう、のう、ルードヴィヒ」

「そうでございますね、幼き子に未だ未だ無理がありませんか」

しまったな、トイレに行きたくなってきた。

此処は、漏らそう、死にたいぐらい恥ずかしいが、これほどのイン

パクトはあるまえ。

「ううー」

「どうした、テレゼ？」

「おちっこー！」

「シャーーーーー」

「わあああん」

お父様、冷たいですが、申し訳ありません。

「陛下お召し物が」

「よいよい、長きにわたり、此処にいたのじゃ、子供には、辛かる  
う、

すまぬが、ルードヴィヒ、着替えて参る、

暫く、儂の代わりをしていて欲しい」

「判りました、陛下」

「テレゼも疲れたであろう、今日はもう休むのじゃ」

「おとうしゃま、ぐすぐす」

ああー恥ずかしい！！

一生言われるんだらうな。

冷たいし。

早く着替えよう。

第六話 士官学校探訪（前書き）

書くのが止まらない。

## 第六話 士官学校探訪

帝国歴476年7月8日

オーディン 帝国軍士官学校  
ライエンフェルフ中将

アルノルト・フォン・フ

本年度の士官学校入校式に、皇帝陛下のご臨席を、賜る事になった。

国防の第一たる士官達にお言葉をいただけるそうだと。  
その後、在校生の授業も見学することだ。

本来であれば、入校式当日は授業はないのだが、本日は普通道理行うことと成った。  
長い一日と成りそうだと。

オーディン 帝国軍士官学校  
イエンタール

オスカー・フォン・ロ

全く今日についていない、昨夜の女は良かったが、旦那が居るとは知らなかった。

いきなりベランダから逃げる羽目になるとは、まったく。

しかも隣には、朝からテンションが異様に高い鶏冠頭が居るし、五月蠅い頭が痛いだろうが！

皇帝の臨席だって全くくだらん、気まぐれはやめて欲しい物だ。

オーディン 帝国軍士官学校  
ヒ4世

皇帝フリードリ

士官学校へ行くことになった、本来であればこの様なことは、する気が無いのだが、テレゼが兵隊さんの学校を見てみたいというので行くことにした。

オーデイン 帝国軍士官学校  
テレーゼ・フォン・  
ゴールデンバウム

やって来ました、士官学校、父様がへんな女に、引つかからないように、最近色々なところへ、連れて行ってもらっています、上目遣いのおねだりモードで大概OKです。

それに、今年の入学生には原作キャラが居ないけど、在校生には、ロイエンタール、ミッターマイヤー、ビッテンフェルト、ワーレン、アイゼナツハとか居るし、顔見せには良いかなって。

父様と一緒に侍従武官やらと共に学校へ行くと、宇宙艦隊司令長官ヴィルフリート・フォン・ベヒトルスハイム元帥が校長のアルノルト・フォン・フライエンフェルフ中将与共に、迎えに出てきた。へー、ミュッケンベルガーは未だ長官じゃないんだ。

挨拶が終わって早速、入校式で訓辞を行う、父様と長官、今までこういう事は余りないことらしくて、校長が卿達は名誉であるとか言ってる。最後に私が、「お兄ちゃん達、頑張ってください」って言ったら、結構盛り上がった。萌はこの時代にも通用するんだね。

次に4年の授業を見学、戦略理論見たら、教官が良いところ見せようと、前の方の学生にこの問題を解けて言って、立ち上がったのが、錆銅色の髪で後頭部が跳ねてるって、アイゼナツハじゃない？

この頃から無口だったんだな、ヤーとかしか言わないし。

次に行くのか、話してみたいんだけど、仕方がないか。

続いて3年にやって来ました、3年生は格闘術ですか、体操着を着てやってますね、まあ皇帝の手前、装甲服は着れないんでしょうね、勝ち抜きをやってるようで、ベスト4が決まったようです。

ここから、天覧試合と言うわけですね。

残ってるのは、やっぱり、ロイエンタール、ビットンフェルト、ワールンですね、残り一人は見たこと無いので、モブキャラですね。

始めの合図で、4人が戦闘始めましたね、おっビットン強いモブを一発ですっ飛ばした、ワールンとロイエンタールは、間合いを計ってる、ワールン出るけど、ロイエン軽く足払い、すっ飛んだー、最後は、ビットンVSロイエンですか、ビットン相変わらず猪突猛进、ロイエン飛んだ、再度突っ込むビットン、ロイエンそのまま受け流しながら、足払いしながら、一本背負いだ。ロイエンタールの勝ちだ。

ロイエンタールには、父様から金時計が贈られました。

私は、「父様絵本で見たんだけど、勝利の女神がキスするのってありですよ」て言ったら。

『よいよい、テレゼの好きにするがよい』とにこやかにOKしてくれました。

その後、ロイエンタールのホッペにキスしました。

ロイエンタールは、ビックリしましたね。

ビットンフェルトには、持ってきていた、銀製の櫛をあげました、喜んでいたよ。

ワールンには、ハンカチをあげました、恐縮ですって言った。

オーディン 帝国軍士官学校

オスカー・フォン・ロ

イエンタール

驚いた皇帝から金時計を下賜されるとは、さらに驚いたのは皇女が俺にキスしたことだ、勝利の女神うんぬんと言い、皇帝の許可を受けほつぺたにキスしてきた、明日から噂が流れるだろう、マールバッハの家からも言ってくるかも知れんな。

オーデイン 帝国軍士官学校  
ビットェンフェルト

フリッツ・ヨーゼフ・

皇帝陛下のご臨席による授業と聞いて、俺たち平民には関係ないと、ワーレンと話したのだが、まさか陛下から、お言葉を賜るとは思わなかった、それにだ、皇女様が、にこやかに来て、『すごいです』とおっしゃって、『髪が乱れてますう』とご自身ご使用の銀の櫛を賜されたのだ、大変感動した、大事にしよう。

オーデイン 帝国軍士官学校  
ワーレン

アウグスト・ザムエル・

皇帝陛下のご臨席による授業と聞いて、俺たち平民には関係ないと、ビットェンフェルトが話してきたのだが同感だった、しかし俺たちが、最後まで生き残り戦い終わると、4人とも皇帝陛下から、お言葉を賜るとは正直驚いた。  
しかも、皇女様が、『汗がすごいですう』と言い、ご自分のハンカチを、俺に下賜されるとは驚きだ、使うわけにもいかんから、大事に保管しよう。

オーデイン 帝国軍士官学校

テレーゼ・フォン・

## ゴールデンバウム

3年の授業が済んで、いよいよ疾風ウォルフの2年生です。

戦術理論の授業か、教官理屈倒れのシュターデンじゃん、うわー、  
『皇帝陛下の御為に』とかそんなことばかり言い始めたよ、父様の  
前だからみんな真剣に聞いているけど、眠くなるねこれ、んーウォル  
フ居るかなー、前の方には居ないな、あっ居た後ろの方で、なんか  
書き物しながら見てる。残念、前にいれば喋れたかも知れないのに、  
仕方ないか。

結局シュターデンの眠くなる授業のせいで、途中から寝てしまい、  
気がついたら、宮殿に帰る車の中でした。

帰ったら、お父様とお母様と一緒に御夕飯を食べて寝ました。

最近とみに、お父様とお母様の仲が良いので、アンネローゼフラグ  
を断ち切れそうな勢いです、このまま行けば、ラインハルトは只の  
人だね。

帝国歴476年7月8日 深夜

オーデイン 某所

「して今日の動きはどうじゃった」

「間者の話ですと、格闘戦を見て、喜んでいたとのこと」

「くだらんな」

「さらには、勝者に話しかけ、頬にキスをしたとか」

「立場が判らん、子供じゃ」

「まことに」

「最早、放置しても良いかもしれん、あの者は、どう言っておる」

「無邪気で、思慮の足りない子供だと」

「陛下もあの女の元に通い詰めておる、最早又、子ができるやもしれん」

「そちらに力を入れるようにと命令せよ」

## 第六話 士官学校探訪（後書き）

次回予告

パッパパーパー、

皇帝の浮気癖を阻止しようと、テレエゼは行く、そして母に運命の  
日が！

次回、銀河英雄伝説Ⅴラインハルトに負けません

第七話 初夏の風そして

銀河の歴史が又1ページ

## 第七話 初夏の風そして

帝国歴477年3月31日

オーディン ノイエ・サンスーシ ベーネミュンデ侯爵邸  
テレーゼ・フォン・ゴールデンバウム

最近お母様の機嫌が非常によい。

やはりお父様が毎日のように来てくださるからだろう。

昨日もオペラ鑑賞に連れ立っていった、ローエングリンらしいがよく知らない。

メックリンガーなら知ってるだろうけど、未だに繋がりが無いし。

このところは、ロリコン趣味の女遊びが絶えてきて真つ当な生活環境へと変わってきている。

たくよー50過ぎの男が15歳を愛人にするんじゃないよ。

それを勧める、茶坊主どももどうしようもない。

やっと女の陰を薄くできたから、これから変な女に、引つ掛からアンネローゼないようにさせなければならぬ。

帝国歴487年にお父様が亡くなられるのを、防ぐためお酒をあまり呑まないように、あちらこちらへと一緒に動いて出かけるようにしている。

最近は顔色も良く息切れも無いようだ。

この半年でも山登り（庭園内の丘だけ）やハイキング、乗馬など一緒に楽しんでいる。

意外だったのはお父様は乗馬がヘタだったことだ、若い頃放蕩三昧だったため遊んでばかりでやってなかつたらしい。

出来るなら何とかして役立たずの門閥貴族を潰して、帝国を再生したいな。

まずは、グリーンメルスハウゼン爺様に繋ぎを作って、相談に乗って貰わないとだめだな。

んーしかし、いきなり会うと他の者に不審がられるから何とかチャンスを作らないと。

そう言えば、ケスラーって何時から、グリーンメルスハウゼン爺様の部下だっただろう。

映像見るとずいぶん親しそうだし、個人的にかなり前から繋がりがあったのかもしれないな。

472年に士官学校卒業してるから、25歳で大尉ぐらいかな？ケスラーが来てくれれば、これほど頼もしいことは無いのに。

帝国歴477年4月1日

オーディン ノイエ・サンスーシ ベーネミュンデ侯爵邸  
テレゼ・フォン・ゴールデンバウム

本日お母様から重大な発表があるとのこと。

お父様が臨席する夕食時に発表するからと待ちの姿勢。

夕方6時にお父様が来てくれました。

そしてにこやかな、お母様から発表がありました。

『テレゼに弟か妹が出来ますよ』

流産予定の子供か。守れたら守りたいな。

「お母様、わー嬉しいおめでとんです」

お父様も喜んでくれました。

よしこれで、当分の間他の女は排除できるだろう。  
エイプリルフルじゃないよね。

帝国歴477年4月

オーディン 某所

「あの女が又妊娠したと」

「あの者よりの知らせにございます」

「早い内に始末させるのだ、小娘のように生き残る可能性もあるのだから」

「流産と言うことでよろしいでしょうか」

「お前に任せる」

「御意」

帝国歴477年6月30日

オーディン ノイエ・サンスーシ ベーネミュンデ侯爵邸

テレゼ・フォン・ゴールデンバウム

ふつうつ、そうなんだよね。

新しい寵姫としてアンネローゼがやって来たそうだ。

お母様が非常に怒っておられた、危険な兆候だ！

アンネローゼが来たのって、宮内省職員が自分の点数稼ぎのために見つけてきたんだよね。

そうならないように、お父様をお母様の元へ日々通わせる作戦だったが、

子供が出来たから夜のお勤め無いから、お寂しいであろうと勝手に連れてきやがった。

余計なことをしくさってからに！

ここの所お母様の所へ度々通っていたから、安心してアンネローゼを探せ作戦を行わなかったけど、てか探せるわけがないけど。

原作道理起こるのか、イベントが！

歴史の修正力というやか、はたまたバタフライ現象か。

これでラインハルトがやって来る！！！！

帝国の危機だー！

お父様も押しに弱いから、認めてしまおうし。

お偉いさん達もあまり、お母様に権力が行くのが危険と感じたのだろう。

クソッ、コルヴィッツめ一時は出世して喜んでるだろうが、いつか必ず後悔させてやる！！

とにかくも信頼できる味方を探さなきゃだめだ。

グリーンメルスハウゼン爺様に早く繋ぎを取らないといけなくなった。

帝国歴 477年 7月

オーデイン 某所

「陛下に新たな寵姫が出来たな」

「はっ宮内省の役人が市井で見つけてきたとのこと」

「平民か？」

「いえ一応帝国騎士ですが、平民以下の生活だったとか」

「歳は幾つだ」

「15歳で在ます」

「良いの、こここの所。陛下は酒もあまり飲まず健康になりつつあるから、

新しい寵姫に性を吸われれば早くに衰弱しよう」

「まことに」

「政権にしがみつきたがるあの老いぼれ共に、

侯爵夫人の権勢が増えたと困ると、

囁き新たな寵姫をもつて侯爵夫人を牽制せよと言ったが、

これほど早く決まるとはおもわなかった」

「これで流産すれば万々歳じゃ」

「御意」

## 第八話 織り姫VS彦星（前書き）

時間が中々進まないのので、戦闘シーンが殆ど無い銀英伝に。

## 第八話 織り姫VS彦星

帝国歴477年 7月7日

オーディン ノイエ・サンスーシ オルテンシア庭園  
テレゼ・フォン・ゴールデンバウム

本日非公式ながら新寵姫アンネローゼと顔を合わせる事にした。  
本来であればこの様なことは異例なのだが、

数日前お父様に『会わせないと二度と一緒に風呂に入らない』と  
だだをこねて今日という日を迎えた。

その際に弟も見たいから連れてきてと無理矢理に連れてこさせるこ  
とにした。

お母様にはコッソリと泥棒猫の顔を見てきますと言ってきた。

形式的には庭園散歩中の、皇帝父娘が偶然庭園に来ていた新寵姫姉  
弟に会うという良くあるパターン。

取りあえず一発目が肝心なので、如何にも皇帝の娘という態度をと  
らなきゃね。

庭園の東屋で待っていると侍従に先導されたアンネローゼとライ  
ンハルトがやってきた。

おうおうアンネローゼの人生あきらめた感じとラインハルトの苦虫  
つぶしたような顔を無理に平常にしているような感じがよくわかる  
な。

此方の侍従がわざとらしく大きな声で『皇帝陛下ご臨席でございま  
す』と言つと

お父様が『うむご苦労、して其所に居るのは誰じゃ』と言えば  
向こうの侍従が『グリユーネワルト伯爵夫人とその弟にございます』  
と返す

お父様『此方へ来るが良い』  
ですぐ近くへ来たというわけ。

「伯爵夫人此所はどうじゃな？」

「このように綺麗な庭園は初めてでございます」

必死に自分の運命を諦めて居る方は気の毒なだけだね、けど貴女こそ最大のキーパーソンですから。

「そこもこは誰じゃな」

「伯爵夫人の弟にございます」

「面を上げよ」

「良い目をしておるな」

目の奥に憎悪の炎が見えるよ。

この目を見て良い目だなんて、お父様この時からラインハルトに期待していたのかもしれないな。

「今年より幼年学校で学ぶとのことだ」

「励めよ」

「はっ」

ぶぶっスゲー演技腹の中は煮えくりかえってるだろうに良くやるよ。

で帰って一人で怒りを滾らせるんだね、  
キルヒアイスが未だ来てないから。

さて私の出番だ一丁やりますか。

「お父様その方が伯爵夫人ですか？」

「そおじゃ伯爵夫人じゃ」

「グリユーネワルト伯爵夫人ご機嫌麗しく、私テレゼ・フォン・

「ゴールデンbaumでございます」

「テレーゼ皇女様ご機嫌麗しく、アンネローゼ・フォン・グリューネワルトでございます」

「弟御の名は何とおっしゃるのですか」

いきなり振られて驚いてるな　くくく

「テレーゼ皇女様ご機嫌麗しく、ラインハルト・フォン・ミューゼルと申します」

ここでいたぶるのも一興だけれど、必要以上に憎悪をたぎらせる必要もあるまい。

普通にやりますか。口元を扇で隠してお母様のような口調で。

「ラインハルトとやら、美しいのまるで彫刻のようじゃ、さぞやおなじにもてようぞ。

将来が楽しみじゃ、士官学校を出たら妾の近衛に成るがよい楽しみじゃ。」

ふふ、とまどつてら何を言ったらいいかわからんだろうね。

「よいよい、名誉なことと戸惑っておるのじゃろ」

「お父様―昼餉に行きましょう」

「そうじゃの」

帝国歴 477年 7月7日

オーディン　ノイエ・サンスーシ　オルテンシア庭園

ラインハルト・フォン・ミューゼル

今日姉上と共に皇帝に会いに来た、姉上を奪った敵の姿を見てやる！  
案内役が姉上と俺を連れて行く、偶然を装い会うらしいがくだらん

作法だ、俺が宇宙を手に入れたらくだらん作法など廃止してやる！

皇帝とその横に小さな少女が居る、皇帝の娘か。

「伯爵夫人此所はどうじゃな？」

「このように綺麗な庭園は初めてでございます」

わざとらしい挨拶が続く。

皇帝が俺の存在を聞いてきた、知ってるだろうにくだらん。

憎悪の目で見たが、皇帝は気がつかないようだ。

「良い目をしておるな」

「今年より幼年学校で学ぶとのことですよ」

「励めよ」

言われたので「はっ」と言っちゃった。

いつか貴様にその犯した罪にふさわしい最後をくれてやる！

キルヒアイスはどうしているんだろう？

姉上に皇女が挨拶してきた。

そのうちに俺の名前を聞いてきた、姉上に迷惑がかかるといけないのでしっかり作法道理に名乗ってやった。

するとだ『ラインハルトとやら、美しいのまるで彫刻のようじゃ、さぞやおなじにもてようぞ。』

将来が楽しみじゃ、士官学校を出たら妾の近衛に成るがよい楽しみじゃ。』

上から見下すような傲慢な態度で話してきた！

近衛だとふざけるな！

俺は案山子になるつもりはない！

姉上のため俺は宇宙を手に入れるのだから。

帝国歴 477年 7月7日

オーディン ノイエ・サンスーシ オルテンシア庭園 アン  
ネローゼ・フォン・グリユーネワルト

今日皇帝陛下よりテレゼ皇女殿下が私とラインハルトに会いたい  
と言うことで参内させるようにと連絡が来たため、ラインハルトを  
連れて庭園へ向かった。

侍従の案内で皇帝陛下にお会いし、ご挨拶後にテレゼ皇女殿下が  
私に挨拶していただいた、私も挨拶を仕返した。

テレゼ皇女殿下はにこやかに挨拶してくれその後ラインハルト  
にの名前を聞いてきた、  
ラインハルトがしっかりと挨拶できるか心配したのですが、ちゃん  
と挨拶できて安心したのですが、

皇女殿下が『ラインハルトとやら、美しいのまるで彫刻のようじゃ、  
さぞやおなじにもてようぞ。』

将来が楽しみじゃ、士官学校を出たら妾の近衛に成るがよい楽しみ  
じゃ。」

とおっしゃった所ラインハルトの顔がきつくなって来たのです、  
あの子は少々気の短いところが有るので何かしないか心配でしたが、  
皇帝陛下が『よいよい、名譽なことと戸惑っておるのじゃろう』  
とフォローしていただいたのでありがたかったです。

## 第八話 織り姫VS彦星（後書き）

アンネローゼ側を入れました

第5次イゼルローン攻略戦の並行追撃作戦対策作戦は有るんですが、  
そこまで行くのが大変。

第九話 それぞれの昼餉（前書き）

ぎりぎり12日更新です

## 第九話 それぞれの昼餉

帝国歴477年 7月7日 昼

オーディン ノイエ・サンスーシ ベーネミュンデ侯爵邸

テレゼ・フォン・ゴールデンバウム

アンネローゼとラインハルトとの面会を終えたあと、お父様と馬車でお母様の待つ館へ向かう途中

「お母様の真似をして喋って見ました」

「はははそうかそうか」

「どうやら誤魔化せたようです。」

今日は昼餉をお母様とお父様一緒に食べるようにして貰っていますので、

あとは本人達の気分次第で落ち着くのではないかと思うのですが、悪なら私が出て仲裁を計るつもりです。

館に着いたらお母様がお出迎えに出てきていました、

やはり焦りがあるのでしょう普通なら執事が迎え入れる物なのですがね。

お母様はにこやかに「陛下きていただき有り難うございます」

ふむ普段の母上の苛つきが消えている良いことだ。

食事中は当たり前障りのないお話や私の教育に対する話などだったのですがねー

デザートになるとお母様が『新しい寵姫の寝心地はどうですか』ってジャブな嫌味を一発

うわー母様ストレート過ぎます子供がいるのですよ

すると父様『テレエゼが嫌がったから、まだじゃ、元々國務尚書等が勧めてきたので仕方なくな』

すると母様少し考えてから、『若い寵姫を求めるのは仕方がない事ですがテレエゼの為にも館への行脚は出来る限りお願い申し上げます』

おつ母様手を未だ出してないと聞いて少しは和らいだ。

まあ数日前から母様をフォローし続けたかいがあったよ。

他の寵姫の手前毎日来るのは無理だけど、出来るだけ多く来てくれると父様が約束してくれました。  
家庭円満に成らなきゃだめだね。

結局その日はお父様はお母様と私の教育について話し合うことになり館に泊まることになりました。

お母様は夕餉の際には数日前までの苛つきやドンヨリした空気が無くなり晴れ晴れとしていました。  
よかったよー。

けど今年の九月から始まる私の本格的な教育について話があったので、

私としては内容が厳しそうなのでブルーに成りましたよ。

てか、紅茶の銘柄だとか、お香の銘柄、とかいらねー！！

ご学友を誰にしようとかも話が出たし、話が合うか不安だね、

こちらら、皇女でも根が庶民ですからね。

なまじ原作知ってるし下手に親しくなっってその子が不幸になるとか知ってるって絶えられないじゃん。

逆に災いになるのだとどうしていいやら。

なまじ軍事知識があるのも善し悪しで、口を出したいんだが出せないもどかしさ。

アルレスハイム、サイオキシシ麻薬、イゼルローン攻防戦、ティアマト会戦とか

軍事的に教えたいのが教えられない、教えたら教えただ変に思われるし

暗殺の黒幕も未だに解らないし、下手に爪を出すわけにはいかないんだよね。

こまったもんだ。

相談できるブレインが欲しい今日この頃。

グリーンメルスハウゼン爺さんに早く会いたいのに機会が全くない何とかしてくれー！

帝国歴477年 7月7日 昼

オーディン ノイエ・サンスーシ ベーネミュンデ侯爵邸  
フリードリヒ4世

本日テレゼが、新しき寵姫アンネローゼとその弟に会ってみた  
いと言われたために場を設けることにした。

わしは、娘には弱い父親なのでついついテレゼに甘くしてしまう。  
アンネローゼの弟に会うのは初めてじゃったが、あやつに会った時  
心地よさを感じてしまった、

あの目あの表情、普段皇帝たるわしに媚び諂い裏では罵っている者  
たちと違う

わしを恨み憎む目がはっきりとわかった。

あの者こそわしの長きに渡る鬱積とした心を流してくれるのではな  
いか。

あやつは、わしの願いをかなえてくれるであろうか。

だがテレゼとシュザンナを巻き込みたくはないものじゃ。

テレゼも何か感じたのか、あの者に挑発的な態度で臨んでいたの、普段のテレゼとは何か違うテレゼを見たようじゃ。

テレゼ自体はシュザンナのまねをしたと言っておるが、あれはわしと同じかも知れん、50年間周りを謀り続けたわしのように。

テレゼがそうであれば、また違うやり方もできるかも知れん、グリーンメルスハウゼンに相談してみるか。

帝国歴477年 7月7日 昼

オーディン ノイエ・サンスーシ ベーネミュンデ侯爵邸  
シュザンナ・フォン・ベーネミュンデ

本日テレゼが憎つくき女を見に行くという。

そんな女見に行く必要がないと言ったが、『お父様を連れてくるし泥棒猫を見えます』と

健気なことを言ってくれたので送り出すことにした。

昼餉の用意をさせ待っていると、テレゼが陛下をお連れしてくれ  
た、

玄関へ迎えた時テレゼとにこやかに手を繋ぎながら馬車から降り  
てくる姿を見たとき

今までの鬱積した気持ちが消えていく気がした。

けれども少しは陛下に怨みの一つも差し上げようと、

『新しい寵姫の寝心地はどうですか』いってあげましたわ。

陛下は慌てて『テレゼが嫌がったから、まだじゃ、元々國務尚書  
等が勧めてきたので仕方なくな』

まあ寵姫のもとへ行くのも仕事のうちですから、そこところは納得してあまり行き過ぎないように、

『若い寵姫を求めるのは仕方がない事ですがテレゼの為に館への行脚は出来る限りお願い申し上げます』と釘を刺しておきました。

今日のことともテレゼが私のことを思い行ってくれたこと、

本当にこの子は健気で可愛いのでしよう、

ずっとずっと守りますからね、私の大事な大事なテレゼ。

帝国歴477年 7月7日 昼

オーディン ノイエ・サンスーシ グリユーネワルト伯爵

邸

「ラインハルトいよいよ明日から幼年学校ですね」

「はい姉上」

「ラインハルト別に軍隊へ入らなくても、官吏とかでもいいのじゃない、あなたが危険なところへ行く必要はないのに」

「姉上僕は軍隊へ行つて出世したいんです」

「無理をする必要はないですよラインハルト」

「いえ自分の決めた道です」

「そうですね」

一人で大丈夫なのかしら、ジークが居てくれたら。

「ラインハルト一人で大丈夫なの？」

「大丈夫ですよ姉上、もつともキルヒアイスが居ればもつといいでしょうけど」

「それではジークが言いたいえば入学できるよう

皇帝陛下にお願いしてみます」

「姉上そんな事が出来るのですか？」

「ジーク一人なら可能だと思います」

「姉上よろしくお願いします」

「けどジークが行きたいと言ったからですからね、無理やりはいけませんよ」

「わかっていますよ、けど絶対キルヒアイスは来てくれます」

「そうなるといいわねラインハルト」

「ええ」

第十話 ロイエンタールはロリエンタール？（前書き）

士官学校の一年後です

## 第十話 ロイエンタールはロリエンタール？

帝国歴477年7月8日

オーデイン 帝国軍士官学校

リヒャルト・オイゲン

今年も新学期が始まる私も此で2年だ。

士官学校は2人部屋で1年と3年、2年と4年という感じで、上級生と下級生をペアーにして部屋割りをしている。

私が去年大いなる大志を抱いて入校したのが昨日のように感じる、まさかの皇帝陛下と皇女殿下のご臨席、そしてお言葉を賜るなぞ、平民としては破格のことだった。

さらに皇女殿下が『お兄ちゃん達、頑張ってください』と仰った時の同期生の興奮ぶりは今でも耳に残っている、あれで皇女殿下のファンになった同期達が多数でた、かく言う私もファンだ。

そのあと陛下達は各授業を見学していったそうだが、3年の格闘授業で決勝者4人に陛下お褒めのお言葉を賜ったそうだ。

それよりも全校生徒が注目したのは、優勝者であるロイエンタール先輩が皇女殿下にキスされたという話だった、この話は噂好きな連中の手で夕方には全校生徒に知れ渡り、

テレーゼ皇女様ファンクラブ（当日の昼過ぎには雄志が作成していた）の面々が『ロイエンタールの女つたらしー！』や『ロリエンタール！』と騒ぐシーンも見られた。先輩方の話によるとロイエンタール先輩は入校当初から女癖が悪く彼方此方の女性と浮き名を流していたそうだ、彼女を寝取られた方も居るそうで、その男が我らがアイドル、テレーゼ皇女様のキスを奪ったと尾ひれが付いたらしい。実際には頬にキスだったそうだが、食堂の灼熱ぶりは凄まじかったものだ。

そのほかテレゼ皇女様が2位のビットンフェルト先輩に銀の櫛を3位のワーレン先輩にはハンカチを賜った後が大変だった。先輩方が貰った物を是非見せてくれと行列を作り、ハンカチに至っては香りをかがせるとか、変態じみた方々が多数出現した。大騒ぎになりシュターデン教官が怒りまくっていた懐かしい思い出だ。

しかしその当事者の一人ビットンフェルト先輩とルームメートの私にしては先輩が貰った櫛をコソソリ見せてくれたの、舐めさせるだの言われて困ったものだった。

ルームメイトとして先輩と住みだして4日目だったからどうという反応をして良いか迷った物だ、

先輩は概して豪快、大雑把、猪突猛進と来ているが悪い人ではないし、親身になって色々教えてくれている、だが歯止めがきかないときは自分が押さえ役として動かざるを得ないのが何ともいえないな。

2年に成ってルームメイトが変わるかと思ったが今年もビットンフェルト先輩と同室である意味期待ある意味ガツカリな自分が居るが微妙なところだろうな。

先輩はさつきから洗面台で髪型の調整をしていて最後の調整にあの銀の櫛を使っている。

さてあと一時間もすれば新学期だそろそろ支度をしよう。

オーディン 帝国軍士官学校                      フリッツ・ヨーゼフ・  
ビットンフェルト

もう4年長かった士官学校も今年で終わりだ、去年は始まって早々皇帝陛下とテレゼ皇女様をご臨席して銀の櫛までいただいた、

今でもテレゼ皇女様の笑顔が目には浮かぶ、貰った櫛はこの髪型の仕上げに大事に使わせて貰っている、うむそろそろ支度をせんと遅刻してしまうな、「オイゲンそろそろ行くかー」

オーデイン 帝国軍士官学校  
アウグスト・ザムエル・ワレーン

あれから1年か格闘授業で3位になり陛下のお言葉と皇女殿下からハンカチを賜ったのが昨日の事のようにだ、ハンカチは大事にしまっておこうとしたが、どこから噂が漏れたのか『見せる』『香りをかがせる』などの輩が多数寮の部屋にまで押しかけて来るようになった、部屋の鍵を開けようとする馬鹿まで現れたので、仕方なく額に入れ両親に預けて実家へと避難させた。本当は持ち歩きたいのだが仕方がない。

オーデイン 帝国軍士官学校  
オスカー・フォン・ロイエンタール

やっと4年だ去年は散々だった。

いきなり皇帝から金時計は貰うわ皇女からキスを貰うわ。

其れだけなら良いそれに尾ひれが付いて『ロイエンタールが皇女のキスを奪った』だの『5歳児に欲情するロイエンタール』『女の敵』『馬鹿野郎』『テレゼ様汚した悪い奴』だのさんざん言われまくり、

遊び相手の女達にも『ロリなんでしょ』『ツルペタが好きなのね』『皇女様相手では分が悪すぎます』『皇女様のお相手を奪うことは出来ません』とか言われまくって女があまり寄りつかなかったのだ。

俺が何をしたと言うのだ、みんな勘違いではないか！

最近疎遠だったマールバツハの伯父もいきなり連絡してきてパーティーに招待され行ってみれば、

会う人それぞれに『テレーゼ皇女殿下より接吻を賜り有望な甥でございます』と紹介はするわ

『オスカーどうだ養子に成らんか』と言ってくるし、全くろくな事が有りはしない。

早く卒業して任務に付きたい物だ。

オーディン 帝国軍士官学校

ツターマイヤー

ウォルフガング・ミ

今年も新学期が来たいよいよ俺も3年か、去年は学校中がテレーゼ皇女様で盛り上がっていたな、3年生のロイエンタールという先輩がキスしたとかで、大波乱が起きていたが、自分はエヴァ一筋だから気にしなかった。

卒業したらエヴァにプロポーズしたいが、エヴァが受けてくれるか不安なんだよな。

オーディン 帝国軍士官学校

リヒャルト・オイゲン

大変な事が起こった。今年もテレーゼ皇女様が来て下さるはずだったのだが、校長フライエンフェルフ中将とシュターデン教官が昨年の新学期早々の学校で起こった騒ぎ（ロリエントール事件）を鑑み今回はご遠慮願ったらしい、其れを聞いた在校生は大騒ぎを起こ

し、『校長を変える』『シユターデン消える』とか大変だった。皆  
ガツカリしている残念だ。

第十一話 刃物女とお友達（前書き）

第十話最後を補填しました。

## 第十一話 刃物女とお友達

帝国歴477年7月25日

オーディン           ノイエ・サンスーシ   黒真珠の間           テ  
レーゼ・フォン・ゴールデンバウム

本日9月から一緒に勉強するご学友との顔合わせが有るのでパーティーを開くことになった。  
いやね一々そんなことでパーティー開くのも馬鹿馬鹿しいと思うんだけど、貴族社会じゃ此が常識で議会無いからこういう時に色々な決め事とかもするんだって。

いつもの通り『皇帝陛下の御為に』『皇太子殿下万歳』『皇女殿下万歳』

とか言ってるんだけど、大半は内心お父様を侮蔑してるんだよね。虎視眈々と次の皇帝の位を狙う物達や媚びを売って要職に就こうとする者千差万別だね。

向こうでは、ルードヴィヒ皇太子がにこやかに挨拶しているんだあの元気な兄上が483年ぐらいに急死って怪しくない？殺られたんじゃないかと推測してますよ。

OVAでヘルクスハイマーがリッテンハイムに死産したと言われている兄上を殺したんじゃないかと言って、私は知らんがブラウンシュヴァイクならやりかねないと言っていたから、しかも483年と言えれば父様も重篤に陥っていた、その時に後を継ぐべき皇太子が急死し残るのは門地の後ろ盾がない1歳ほどの赤子どう見てもブラウンシュヴァイク、リッテンハイムが絡んでいるとしか見えないんだ

よね。

フェザーン&地球教という可能性もルビンスキーが482年に自治領主に就任しているし前の自治領主は地球教の支持から逸脱して処分されている訳だし就任記念の実績作りに暗殺した可能性もあるなただあの時点では帝国同盟とも戦力はほぼ拮抗。所謂48対40対12の状態でわざわざ帝国が減ぶ様なことをしないだろう、後半のルビンスキーなら独自の判断でしただろうけどあの当時そんな力はないはず

しかし注意しておくことには手を抜かないようにしないと駄目だな。

しかし今日は私のご学友候補と顔合わせと家庭教師役やお姉様役の夫人や令嬢も来てるから会場に大輪の花が咲いたがごとくなり、その花に群がる貴族の子弟がナンパして居るみたいに見えるね。

私の所にはご機嫌伺いに来る方々の多いこと多いこと、腐っても皇帝陛下の権力は未だあるようです。

アマリーエ、クリステイーネ姉上達は既に売却済みで残りは私だけだからみんな来るよね。

各爵や軍の重鎮達や宮廷の廷臣達の子弟達がわらわらと来ては挨拶をしていくし挨拶し疲れます、帝国貴族だけで4000家以上居るけどまあクロプシュトゥク候のようにハブされてる方々も居るから全部じゃないけどね。

まあ男児はご学友には成らないから将来の許嫁候補で感じだね。

さっき来たのはあのフレーゲル、来た瞬間ウゲツて思ったけど顔に出さないのが仕事だしね、『皇女殿下私も来年には士官学校入校でございませう、是非来年の視察ではエスコートさせていただきます』  
「存じます」

とか言ってくるから適当に煙に巻いておいたよ。

ミュッケンベルガー元帥いやこの頃は大将の子息のフリーデグットさんは14歳だけど大将ソックリな堂々とした体格で好感の持てる方でしたね。

おつ今度来たのはどっかで見た顔だけど誰だっけ？んとウルナイゼン・・・あああのラインハルトの幼年学校同期生でへまやって精彩を欠いて閉職に回されたトウルナイゼンか伯爵だったんだな、まあ普通にご挨拶つと。

今度はマールバッハ伯爵がロイエンタールを連れてきたよ、まあ伯父甥の関係だから有るんだらうけど、にこやかに『マールバッハ伯レオンハルトで御座います、皇女殿下にはご機嫌麗しく、此処に居るのは我が甥オスカーで御座います。先年は皇帝陛下皇女殿下には類い希なる栄誉をいただき祝着至極に御座います』

『マールバッハ伯が甥オスカー・フォン・ロイエンタールで御座います皇女殿下ご機嫌麗しく存じます』

「マールバッハ伯痛み入ります、ロイエンタール卿一年ぶりですね息災にしてみましたか」

「はっ皇女殿下も御息災で何よりで御座います」  
こんな感じで挨拶するんだけどロイエンタールは嬉しくないんだよねきつと、女性に対して母親の増悪があるから。

オフレッサーとかは未だ此処に出られるほどの地位じゃないみたいで姿が見えない会ってみたいのに残念、いずれ装甲擲弾兵の閲兵を父様に頼んで連れて行ってもらおう、今年士官学校へは校長とシユターデンのせいで行けなかったのだから、せめて卒業式には参加したいな。

一休みして午後からはご学友候補のご令嬢方とのパーティーです。同じ歳だけどブラウンシュヴァイク公令嬢のエリザベートとかは来てないんだよね。

館で古典文学を教えて貰う講師としてベアトリクス・フォン・マリーンドルフ伯爵夫人が紹介されたんだけどヒルダのお母さんだよ  
ね？一緒に付いて来ている子供ってヒルダじゃない？

「ベアトリクス・フォン・マリーンドルフと申します、この度皇女殿下へ古典文学をお教えすることと成りました」

「ヒルデガルド・フォン・マリーンドルフと申します以後お見知りおきを」

「よろしくお願ひしますね」

ヒルダシヨートカットじゃない綺麗なロングじゃんいつ頃切ったんだろう。

お外の学校でも習うらしいけど来た方が、ヴェストパーレ男爵夫人だったけど年取ってるよ似てるけど年増です、どうやらお母さんのようですね。

「マルグリート・フォン・ヴェストパーレ男爵夫人で御座います、この度皇女殿下のご教育の一環として我が校の総力を挙げますのでご安心下さい」

総力なんか挙げなくて良いからさ適当にいこうよ>><

「マグダレーナ・フォン・ヴェストパーレと申します以後お見知りおきを」

男爵夫人だこの美少女が芸術家の愛人を7人も囲う方になるのですね、メックリンガーに未だ会ってないのかな？今度聞いてみよう。

次から次へと教師役とお姉様役とのご挨拶が続いていよいよご学友登場か。

ケルトリング侯爵家のクラリツサ嬢、エーレンベルク元帥の曾孫のブリギツテ嬢、メクレンブルク伯爵家のヴィクトーリア嬢と順番に紹介されていく5人いるそうだけど次の言葉にん？って思ったです。

リヒテンラーデ侯爵家エルフリーデ嬢？？？てか彼女刃物女じゃな

いか？うわーリヒテン爺さん養女にして入れてきたのかよ、刺されるのはいやだー！けど見た限り大人しくて可憐な美少女なだけだな。

やっぱり家族殺されて極寒の流刑星に流されたのがやさぐれさせたんだな。

「皇女殿下私エルフリーデ・フォン・コーラあつりヒテンラーデと申しますよろしくお願いいたします」

間違えなんて可愛いじゃん彼女を不幸にしないように頑張ろう。

最後が・・・えっグリーンメルスハウゼン子爵家のカロリーネ嬢・・・  
・・・グリーンメルスハウゼン爺さんの縁者だよね、そうだよな？

「皇女殿下私カロリーネ・フォン・グリーンメルスハウゼンと申しますよろしくお願いいたします」

えーと取りあえず後で聞けばいいか今日はグリーンメルスハウゼン爺さん来てないみたいだし。

「私こそよろしくお願いいたします」  
しかし爺さんこんな孫？いたのか。

まあ此で9月からは6人で勉強だ、科目が多くて憂鬱だね。

第十一話 刃物女とお友達（後書き）

明日から出張でUP出来るか未定です。

## 第十二話 裏の事情（前書き）

出かける前に今日分だけは更新、今夜は難しいです。



オーディン ノイエ・サンスーシ 黒真珠の間 オスカ  
ー・フォン・ロイエンタール

マールバツハの伯父にどうしても言われ行く気がなかった不敬にあたると言われ仕方が無く皇女のご学友お披露目会なるパーティーに参加した。

仕方がなかったがパーティーに群がる無数の艶やかな花達、手折つてみたいと感じたが皇女への挨拶に連れられ挨拶をせざるを得なくなった。伯父だけ挨拶で良いだろうと思ったら俺に振ってきた『マールバツハ伯痛み入ります、ロイエンタール卿一年ぶりですね息災にしていましたか』

はあ！息災じゃないお前のせいで去年は散々だったんだぞと言えないから『はっ皇女殿下も御息災で何よりで御座います』と心にもないことを言ってきた。しかし伯父が又噂を流すかもしれないなんとかしてくれ！

オーディン ノイエ・サンスーシ 黒真珠の間 ヒル  
デガルド・フォン・マリーンドルフ

お母様に連れられてテレーゼ皇女殿下のパーティーへ出席した、お母様が古典文学を教えるそうではお姉様役で遊び相手とかするらしい、テレーゼ様はにこやかでたいそう可愛く可憐なかたでした、今度会えるのが楽しみです。

オーディン ノイエ・サンスーシ 黒真珠の間 マ  
グダレーナ・フォン・ヴェストパーレ

お母様の学校でテレーゼ皇女殿下のご教育をお手伝いすると言っ

ことで、ご学友お披露目会に参加しご学友も観察するために一緒に参加した。皇女様は私顔を見ると一瞬ジーとみましたがすぐに笑顔で挨拶を返していただきました、9月からは私も参加する事になりそうですから頑張らなければなりませんね。

オーデイン      ノイエ・サンスーシ      黒真珠の間      エルフ  
リーデ・フォン・リヒテンラーデ

緊張するな、7月になっていきなりリヒテンラーデ大叔父様から父に私を養女に欲しいと連絡があった何でも皇女殿下のご学友として私が選ばれるそうでビックリした、今日初めて皇女殿下にお会いしてご挨拶したけど、いきなり自己紹介で名字を間違えるんて恥ずかしいよー皇女様は変に思わなかったか其れが不安だよ。けど優しそつなかたで良かった9月からが楽しみです。

オーデイン      某所

「今宵のパーティーは如何でございました」

「小娘の学友選びと婚約者候補選びが茶番だったな」

「そつでございますか」

「うむいくら教師が良くても役に立たん知識ではどうしようもあるまえ」

「御意」

「其れよりあの女の流産はどうした」

「あの者からですと自然に流産させないと怪しまれる為特殊な薬を使うとの事です」

「急がせよ」

「御意」

オーディン      グリンメルスハウゼン子爵邸      リヒャルト・  
フォン・グリンメルスハウゼン

テレゼ皇女殿下のご学友お披露目会に参加したカロリーネが帰  
ってきた。

「カロリーネご苦労であった」

「はっ御屋形様」

「テレゼ様はいかがであった？」

「御屋形様の仰る通り皇帝陛下と同じかと」

「やはりな、自分をお隠し有られる方が」

「御意」

「兄も暗殺され自らも生まれながらに暗殺されかけたお方じゃ陛下  
下と同じ様に成られるのも判る気がするの」

「御意」

「カロリーネ濟まんの無理を言って」

「何を仰います御屋形様、私のような者を養女として育てていただき  
何不住無く居られるのも御屋形様のお陰にございます」

「此から辛かるうがテレゼ様を守ってくれ」

「御意」

「カロリーネあまり鯨張るでないぞ」

「御意」

第十三話 退屈なる日々(前書き)

相変わらず遅い時間経過。

### 第十三話 退屈なる日々

帝国暦477年8月15日

オーディン    ノイエ・サンスーシ    桃珊瑚の間    テレー  
ゼ・フォン・ゴールデンバウム

本日9月からの勉強で宮殿内からヴェストパーレ男爵家が主催する学校へ通うための侍従武官との初顔合わせが行われるのです。お母様は私が外の学校へ通うのは前代未聞だと反対したのですが、お父様が世間を見るのもよいことじゃとお母様を説得し（お父様がお母様のところへ通う回数を増やす約束をしたらしい）週2日通う事に決まり残り2日は館で勉強し1日は見学等の野外学習日で残り2日が休日という感じになるそうだ。

女官に連れられて部屋に入ると既に4人の男女が待っていました。男性2人女性2人で身のこなしから相当な腕の持ち主ではと感じました。

最初にリーダーらしき30代に見える男性から挨拶がありました。「皇女殿下ご機嫌麗しく、この度殿下侍従武官に任命されました、クレメンス・ブレンターノ大佐で有ります」

続いて20代ぐらいの男性が「皇女殿下ご機嫌麗しく、この度殿下侍従武官補に任命されました、ハインリヒ・フォン・ヴィッツレーベン大尉で有ります」

それから20代前半ぐらいの女性士官から「皇女殿下ご機嫌麗しく、この度殿下侍従武官補に任命されました、マルティナ・フォン・バウマイスター中尉で有ります」

最後に同じく20代前半ぐらいの女性士官から「皇女殿下ご機嫌麗

しく、この度殿下侍従武官補に任命されました、ヴァーリア・ディーツゲン少尉で有ります」

4人から丁重に挨拶がされました。こちらも此から命を預ける訳ですから丁重にペこりとお辞儀をしながら「テレーゼ・フォン・ゴールデンバウムです、此から苦勞をかけると思いますがよろしくお願ひいたします」

あまりの丁重さと腰の低さに驚いているようです。普通皇族どころか貴族もこんな態度取らないよね。

まあ最初が肝心ですし嫌々守られるよりは愛想良くしておいた方が良いでしょう。へんな貴族の紐付きだったら嫌ですけどね、その辺は追々判るでしょう。

顔合わせが終わって4人が退席したので自室に帰って何となくボーツとしながら考え事。

今日は日本じゃ終戦記念日かもう日本もないし関係ない日になってるんだけどね、元日本人としてはしみじみする訳ですよ、甲子園も高校野球もない夏の日。

スイカが食べたい気がしますね後で侍従長にスイカがないか聞いてみましょう。

そう言えば来年に第4次イゼルローン攻略戦が有るはずですが原作に載って無いので判らないんですよねOVAでアキレウス級旗艦戦艦がトールハンマーで沈むシーンが出てますが、トールハンマーで沈んだアキレウス級旗艦戦艦は記録上無いので478年に戦没したらしい第4艦隊旗艦アキレウスが該当するんじゃないかと言われてましたからね。けれども来年イゼルローン攻略戦が有るとは言えませんが、何か手は無いですかね。

そう言えば同盟の大規模戦闘のパターンは評議会選挙の年統合作戦本部長改選の時に活発化しましたね、帝国領侵攻作戦が前者でしたし、

ヤンのイゼルローン攻略が後者でしたね。  
同盟の選挙と改選のパターンさえ判ればかなり正確に攻撃がわかる  
のでは無いでしょうか、研究する価値はありそうですね、問題は一  
人でないと行けないと言うことで時間が足りないし資料が集まる  
かどうか、せめて軍務省と統帥本部の協力は欲しいが、あまり動き  
回るのも駄目だし・・・ん・・・困った知識も宝の持ち腐れだよ。  
カロリーネと学友になれたからグリーンメルスハウゼン爺さん家に遊  
びに隠れて会いに行つて相談するかな時間いつが良いんだろう本人  
に聞かなきゃ駄目だから暫くはむりだな。

オーティン      ノイエ・サンスーシ      小部屋

「グリーンメルスハウゼンその娘がカロリーネか」

「陛下そうでございます」

「カロリーネ、テレゼはやはり儂と同じか」

「皇帝陛下皇女殿下は韜晦なさっております」

「鯨張らずに喋るが良いぞ」

「いやしかし恐れ多い事なれば」

「良いのじゃ儂は堅苦しいのは嫌いだな」

「カロリーネ此から陛下には直接度々連絡をするのだからそうせい」

「はっ陛下」

「未だ堅苦しいぞハハハ」

「してグリーンメルスハウゼン今回付けた護衛はどうじゃ？」

「私の部下から選りすぐりの者を選びました、ケスラーは私の代理  
ですので動かさませんが、ブレンターノ、ヴィッツレーベン、バウ  
マイスター、ディーツゲン4人も腕利きでございます」

「女官も4人紛れ込ませております」

「他には？」

「外出時には装甲擲弾兵出身者からなる護衛部隊を2個小隊用意し

ております」

「100人が見事じゃの」

「しかし油断は禁物でございます」

「うむ、カロリーネご苦労じゃがテレーゼを頼むぞ」

「もつたいないお言葉でございます」

「これ。またじゃな、ハハハ」

「カロリーネご苦労」

「陛下失礼いたします」

「さてグリーンメルスよ幼年学校のあの者はどうして居る」

「はい成績は優秀であります共に連れて行った赤毛者も成績優秀でございます」

「ほう思わぬ拾い物であったか」

「そうですね、しかし」

「どうしたのじゃ？」

「あの者達校内でも孤立しており度々喧嘩沙汰を起こしており、さらに姉の悪口を聞くと逆上し石で相手の頭を殴り続けました、幸いにも死者は出ておりませんが問題になっておりまして、放校の可能性も出ております」

「うむその辺は儂が姉に頼まれたとして事を荒立てないよう伝えさせよう」

「そうですね陛下」

「しかしあの者がどう化けるか楽しみよのフッフ」

「グリーンメルスよ此からも頼むぞ」

「御意でございます」

第十四話 退屈なる日々その2（前書き）

すみません、今回話の関係上凄くつまらないです。

## 第十四話 退屈なる日々その2

帝国歴477年9月1日

オーデイン

テレゼ・フォンゴール・

デンバウム

本日より憂鬱な授業が始まります、夏休み明けなのに宿題未だ出  
来てない心境です。

いやね歴史、科学、国語、数学、語学、とかの実用な物は良いんだ  
よ、けど貴族のたしなみお香当てやお茶のブレンド当て（伊藤園に  
でも勤めるつもりか？てかヤンにやらせれば100点じゃねー？）  
とか実用的じゃねー！

通うために用意された地上車を見ればあくまで外見は普通の車の  
様に見えるんだよね外見はさ……でもさーサイズがでかすぎ  
戦車みたいな大きさなんですこれ、乗ってみると又々冗談かと思う  
ような装甲板ですガラスも厚いです後で聞いたら戦艦用装甲板の流  
用だそうです……てかさ其処までしないと外出られないなら出る  
こと無いんじゃないの？と思うが皇女じゃあ仕方がないかあ。

んで朝7時に起きてお母様と朝食後身支度をしたらお出かけです、  
ただねーノイエ・サンスーシってだだっ広いから町へ出るまで40  
分かかるので飽きるよね、出れば20分で着くのによ、宮殿内  
だけでもへりでも使いたいですよね。

9時にやって来ました、ヴェストパーレ家の学校へ皆さん来て  
らっしゃいます、因みに学友5人と共に学園長たるヴェストパーレ  
男爵夫人にご挨拶です。

早速の授業は無いですが此行われる教育の方針とか何を習うとか先生はどなただとか淡々と説明されていきます。

其れが終わると懇談会で先生方と我々生徒達が雑談します、お菓子を摘みながら紅茶で喉を潤す、んー良いねこのままなら良いんだけどね、明日から地獄が始まるのだね。

其れで2日目早速文学の勉強ですか、まあ良いですけど。美術の勉強ですね教師を見るとメックリンガーじゃないですね普通のおばさんです、未だ娘さんはメックリンガーは未だ付き合っていないようですね、8人も愛人居るなんて親が聞いたら泣くよねふしだらな娘ですって、まあそのうちメックリンガーを連れてくるんだろっねその時が楽しみです。

夕方はみんなでお茶会明日は用事がないのでお休みです。

本日は何もやることがないのですよ、仕方がないので作戦を考えましょう。

どっかオーデインへのルートの惑星にグランドキャノン作れないかなと妄想、金と時間がかかりすぎて没、

移動要塞で機動防御だとガイエスブルグで失敗検討を求める、んーろくな事が考えつかんなこんな日はやめよう。

今日明日は宮殿で習い事です、学友が来てダンスにお花にお香にお茶に歌とオペラ鑑賞。

あああくびが出ますね、習いたいことが全然出来ません。

歴史と科学と軍学とか習いたいのですが駄目ですね、お父様に相談するか迷いますね。

休みの日です今までは毎日が休みでしたが休みが減った割にはやる事が有りません退屈です。

いつその事何処かへ行きたいのですが母様は妊娠中父様は謁見で暇

がないそうですタイミングが悪いですね、誰かの家に行こうにも先に連絡して準備をしないと駄目なので時間がありませんでした、次回からはちゃんと連絡をしておきましょう。

帝国歴477年10月

オーディン  
ールデンバウム

テレーゼ・フォン・ゴ

9月から始まった勉強も一ヶ月が過ぎ少しずつ落ち着きを得て来ました。

週1回のペースで順番に学友の家にお呼ばれし同じように週1回で館へは5人全員を呼ぶ形で過ごしてきました。

最初にリヒテンラーデ侯爵家へ行きましたよ、流石國務尚書の家ですね立派です凄いですね、まるで美術館のようです訪ねると侯爵自ら出迎えてくれましたよ。この人映像で見るとスゲー悪そうに見えるんですよ、ところが我々を迎えるときには笑顔なんですよ不気味ですね。越後屋とか似合いそうな感じがして少し笑いそうになりましたよ。エルフリーデは映像を見た感じと全然違って優しいよい子ですから可愛くて仕方有りませんからロイエンタールの毒牙から守ってあげたいですよ。リヒテンラーデ侯とも話をしたいけど今の年齢じゃ駄目でね何とかしたいのは山々だけど年相応の対処しかなできないです。

次がケルトリング侯爵家この家は武人の家系ですからね同盟のブルース・アッシュビーにボコボコにされてから家運が傾いたんですが、ミュッケンベルガー伯爵家とのつながりは非常に強いですからねその筋から復活しようと頑張ってるんですよ。やはり当主のケルトリング少将がお出迎え、雰囲気からして前線方の武人に見えま

すね、ただ此処も同じで話を殆ど聞くことが出来ないんですよ、折角の現場の声が聞こえないもどかしかが残念です。

メクレンブルク伯爵はごく普通の門閥貴族で大げさでなんかランズベルク伯を思い出しましたよ、可もなく不可もない極点的な門閥貴族ですね。相談等はしてもしょうがないタイプふむ員数あわせて集めたような人材だね。

エーレンベルク元帥は子爵です、元帥本来は仕事だけど皇女が来るというのでお出迎えしてくれました、きつと帰ったら書類の山でしようすみませんね。此処でも当たり障りのない話ばかりで終わってしまいました。やっぱ1対1じゃないと話せないね。

やって来ました、苦節6年8ヶ月会いたい会いたいと思っていた、グリーンメルスハウゼン子爵家へ今日突撃です。ワクワクしますね到着するとグリーンメルスハウゼン子爵とカロリーネがお出迎えしてくれました。おおっ初めて見るがこの頃確か67歳ぐらいか未だ未だ元気に見えるこの老人が彼のグリーンメルスハウゼン文書を遺した訳ですね、今回は誰がその文書を手に入れるんだろうか気になるね。

早速ご挨拶「この度はお宅にお呼びいただきありがとうございます」「皇女殿下には我が館に行幸頂き誠にありがとうございます」

よし此でアポの準備ぐらいは出来たね、後はどのように話をするチャンスを作るかだね。

カロリーネさんは控えめな性格で表に出てこないタイプですね。お爺さんと一緒に目立たぬような感じですよ。

こうして9月から始まったお宅訪問は順当に進んでるです。

第十五話 暗雲（前書き）

書いてて感情移入してしまった。

## 第十五話 暗雲

帝国歴477年12月

オーデイン                      ノイエ・サンスーシ                      テレーゼ・  
フォン・ゴールデンバウム

グリーンメルスハウゼン爺様に初遭遇してから既に3ヶ月近くその後会いに行っても軍務や領地へ行っているとかで全然会えません、こりゃ困った避けられているのでしょうか。カロリーネに聞いてもちょうど都合が悪いらしいですと言われています。何とかせねばあかん。

オーデイン                      ノイエ・サンスーシ                      小部屋

「グリーンメルスよテレーゼに会ってやらんのか？」

「今少し資質をみております」

「そちが見て後どのくらいじゃ」

「年明けにはよいかと」

「どのような事を聞きたがっておるのじゃ」

「カロリーネによると陛下の若い頃の話色々聞きたいからと仰っているそうです」

「ふむあの頃のことか」

「ですなあこのころのことでしょう」

「父の威厳は大丈夫かの」

「陛下のお心もテレーゼ様なれば判りましょう」

「まあそうじゃの」

「恐らくその話は口実でありましょう、相当に政治、歴史、軍学などに興味を持たれておりますからそちらの話がメインかと存じます」

「これは楽しみじゃ逐次伝えるように」  
「判りました」

「シュザンナの方は大丈夫か」

「こちらも手練れを付けておりますれば」

「うむ頼むぞ」

「はっ」

帝国歴477年12月24日

オーデイン                      ノイエ・サンスーシ                      テレーゼ・  
フォン・ゴールデンバウム

本日はクリスマスです。この時代にもキリスト教は廃れたようですがクリスマスは有るのです不思議だね

お母様は臨月なので参加せず、宮殿でパーティーよりはヴェストパーレ男爵邸でパーティーをすることにしました。

在校生や教え子さん達が皆さん着飾って来ています、男性は居ないです女だけのパーティーです。

クラちゃんブリちゃんリアちゃんエルちゃんカロちゃんみんなかわいく着飾っています、話すことは誰そのの御曹司は格好いいとか誰それは嫌だとか、かましいですよ。ヒルダさんもマグダさんも来てますから話が弾みます。

聞いているとヒルダさんこの頃から真面目ですね、マグダ姐さんはこの頃既にパトロンを考えているような口調ですね早い早いですね9時までパーティーしてお開き大人の方はこれからご用があるそうです、知ってますけどね、子供はおとなしく帰りますよふふ。

帝国歴477年12月26日

オーデイン                      ノイエ・サンスーシ                      テレーゼ・  
フォン・ゴールデンバウム

クリスマスから2日後、本日お母様の出産予定日です。今までなら何らかの妨害が何者から行われてきたのですが今回はそれに鑑み身元のしつかりした者を付けていましたので安心できるそうです。大きなおなかで辛そうなお母様は先ほどから陣痛がして分娩室へ入って行かれました、私のこともありますので出産後の処置に3人が入り処置するそうです、此なら相互監視が出来ますから安心ですね。

分娩室に入って2時間あまり経ちますが未だに出てきません心配です。

3時間ほどでやっと出てきましたが、侍従長の顔色が悪いです。

「まさかお母様が何かあったのですか？」

「いえ侯爵夫人はご無事ですがお子様の方が……」

「子供がどうしたのですか？」

「お生まれに成ったのですが呼吸をしておらず懸命の処置も虚しく先ほどお亡くなりになりました」

「え……」

「えっ死んだ……死んだ……何で何で……何でこんな所だけ原作と一緒になるの！！」

そんなそんなこの子は無事に生まれてきて育つはずじゃなかったの。みんなで守ろうとしたのに何で死んじゃったの……辛いよ辛すぎるよ幾ら原作がそうだからって、生まれる前から死を宣告されているなんて酷すぎる。あまりに無情すぎるよ！

殺されたんだきつと、兄上みたいにそして私みたいに殺そうとして殺されたんだ！！

ブラウンシュバイクカリッテンハイムかフェザンか地球教か誰に

しても許さない絶対許さない必ず敵を討つ！！  
みてやがれ奴らを地獄の底へ追い詰めてやる！！  
自分らの犯した罪を思い出すがいい！！

「皇女殿下がシヨックで興奮しておられる女官はお連れして差し上げろ」

「皇女殿下さあ行きましょう」

「けどお母様が・・・！」

「ご心配をお掛けしては反って侯爵夫人に障ります」

「判りました」

部屋に帰ってきて一人にしてもらい、この世界に来て初めて思いっきり泣きました、初めて出来る弟か妹大事にしたいと思ったそれなのにそれすら許されないこんな世界の皇帝一家って辛いよね。  
会えなかった弟か妹天国で幸せになってね。必ず敵はとるから見守っていてね。

オーデイン

ノイエ・サンスーシ

シュザン

ナ・フォン・バーネミュンデ

3人目の御産ですから楽に出来ましたが、生まれた子を見て思わず天を呪いたくなりました。子供は奇形児だったのです、私が悪いのでしょうかどうすればいいのか途方に暮れ自分を責めました、目に浮かぶのはテレーゼの笑顔ですこの様な劣悪遺伝子を持つ私がテレーゼの母親として一緒にいられる訳がない、ルドルフ大帝時代であれば母娘共々死を賜るはずです。

たとえ今の陛下でも私はテレーゼと引き離されるでしょう。テレーゼの為ならこんな母親は居ない方がいい死んでしまいたい、丁度手術台上にメスがある、テレーゼこんなお母さんを許しておくれ。

幸せに暮らすんですよ・・・私の大事な大事な可愛い可愛いテレ  
ゼ・・・

「きゃーーーーー侯爵夫人!!!」

## 第十六話 蜉蝣の命

帝国歴477年12月26日

オーテイン                      ノイエ・サンスーシ                      フリード  
リヒ4世

シュザンナが本日儂の子を出産する、テレーゼが生まれて6年又儂の子が出来るとは、帝国を滅びへ向かわせるこの儂に。

出産時には間に合わなかったが3時間後に分娩室へしかし奇形児が生まれシュザンナがショックを受けていると聞き急ぎ向かった。直ぐさま部屋に入ると『きゃー！ー！侯爵夫人！』と悲鳴が聞こえ見るとシュザンナがメスを右手に持ち自らの喉を突こうとしていた。

儂は無我夢中でシュザンナの手を握りしめた、その際手のひらが切れたが、そんなことは気にならなかった。

「シュザンナやめるのじゃ！」  
「陛下お止め下さりますな」  
「馬鹿なことではするではない」  
「テレーゼ・テレーゼの為にございます」  
「テレーゼの為に？」  
「私のような劣悪遺伝子の持ち主が母親ではあの子が不憫です」  
「その様なことはない！」  
「いいえあの子の為に」  
「違つのじゃシュザンナ、違つのじゃ」  
「は？」  
「まず落ち着くのじゃ、そして儂の話をよく聞くのじゃ」

女官達が席を外していくの、グリーンメルの手の者達じゃな

「良いかシュザンナ今回の事はお前のせいではない」

「そんなお慰めを・・・」

「違うのじゃ、此はゴールデンバウムの血なのじゃ」

「陛下のお血」

「そうじゃルドルフ大帝以来ゴールデンバウムの血は汚れ続けてきた、代々死産、奇形児、異常者などが多数出てきて居るのじゃ、だからシュザンナおぬしのせいではない」

「しかし」

「儂の子の内4人は流産、9人は死産、9人が成人前に死んでおる、儂の兄弟も7人が病死じゃ、ゴールデンバウムの血は濁り生命力が衰えておるのじゃ」

「しかし私の血にも有るかも知れません」

「テレーゼを見よあの子は五体満足で何不住無い体で生まれてきたではないか、これがシュザンナお前の功績じゃ」

「陛下」

「テレーゼの為に前は必要なのじゃ母親を失ったとしたら、どれだけ悲しみ傷つくであろうか、そんなことをするでない」

.....

「陛下判りました、テレーゼの為に私は生きてます。テレーゼを守り  
慈しみます」

「判ってくれたかシュザンナ」

「はい陛下、あっお手が」

「よいよいシュザンナが無事だったのじゃこんな傷何ともないわ」

「お手当をせねば成りません」

「たれぞ陛下のお手当を」

「さて、シユザンナよ。テレゼが非常に興奮しているそうじゃ、此から参ろうぞ」  
「陛下お供いたします」  
「親子三人で語ろうぞ」

帝国歴477年12月26日

オーデイン                   ノイエ・サンスーシ                   テレゼ・  
フォン・ゴールデンバウム

ちくしょうちくしょうワンワン泣いていると、女官がお父様とお母様が会いに来てくれたと伝えに来てくれた。お父様とお母様が来てくれた、悲しいはずなのに来てくれたすぐに会いたい、走って出て行った。

「お母様ー、お父様ー」  
「テレゼー」  
「テレゼよ」  
「お母様、お母様赤ちゃんが赤ちゃんが……」  
「テレゼ残念だけど駄目でした」  
「殺されたのですね！」  
「テレゼ其れは違うぞ」  
「お父様違う訳無い！」  
「テレゼ本当に違うのよ」  
「お母様まで悔しくないのですか！」  
「テレゼ落ち着きなさい、そしてよく聞きなさい」  
「お前には辛いかも知れんが、此はゴールデンバウムの宿痾なのじ

「や」

「宿痾？」

「そう長い間溜まり溜まった悪いところじゃ」

「悪いところ」

「幼いお前には辛い、我々の血では赤ん坊が育ち辛いじゃ、そのため今回の子も死んでしまったのじゃ」

「テレーゼご免なさい貴方に弟を生んであげられなくて」

「お母様が悪いんじゃない」

「お母様もお父様も悲しいんだから、三人で赤ちゃんが天国で幸せになれるようにお祈りしようよ」

「テレーゼそうですね」

「テレーゼそうじゃな」

「今日は一緒に寝ましょう」

「お母様お体は大丈夫なのですか」

「大丈夫ですよ」

「僕も一緒に良いかな」

「はいお父様」

「身支度をしましょうね」

「お父様お母様、だいつすき」

両親と寝る準備しながら今回のことを考えていた。

今回は本当に死産だったのか、怒り狂ったがお父様お母様が違うと  
いってくれた、可哀想な弟よ天国で幸せにしておくれ。

ゴールデンバウムの血か、確かに遺伝子異常が多い系統だし生命力  
が弱っているのか。お父様お母様を悲しませ無い為に私がしっかり  
しないと、今日は怒りに任せて切れてしまったけど、命を守る為に  
冷静さを強化しないと駄目だ。

「テレーゼそろそろ寝ましょう」

「はいお父様お母様」

オーデイン 某所

「ハハハハハようやった」

「あの者見事に任務を成功させてくれました」

「そうよ、一時は失敗したかと思うたが見事にやってくれた」

「流産を狙いながら其れが失敗したときの為に奇形児と言う次作を行っておりました」

「奇形児とはゴルデンバウムの血のなせる技か？」

「其れもございますが、フェニトイン、プリドミン等の薬を使うと奇形児率が非常に上がるそうでございます」

「なるほど其れは此からもつかえるの」

「御意」

「あの者には此からも逐一繋ぎをするようにせよ」

「御意」

「ハハハハハアーハハハハ」

第十六話 蜉蝣の命（後書き）

黒幕が動いていました。

## 第十七話 グリンメルスハウゼン子爵（前書き）

やっとグリンメルスハウゼン子爵の話に、ヤンが出るのはいつの日か。

## 第十七話 グリンメルスハウゼン子爵

帝国歴477年12月27日

オーディン           ノイエ・サンスーシ       ベーデミュンデ侯  
爵邸       テレゼ・フォンゴルデンバウム

昨日は悲しいことがありました。弟が生まれそして死にました。取り乱し酷い状態でしたが父様母様によって慰められ勇気付けられました。今日から又頑張ろうという気力がわいてきました。

朝起きると父様母様が見守ってくれていました嬉しかったです。小声で父様が『テレゼや此からのことを思うのであれば年明けにもグリンメルスハウゼンに会ってきなさい』と言ってくれました。私は『はい』と返事をしました。その後支度をして朝食を食べながら赤ちゃんのお墓はどうなるのと聞く皇室専門の墓地に埋葬されたとのことです、早いと思ったら生きられなかったので早く天国へ送ってあげるとのことでした。そんな風習があるのかと思いました。取りあえず午後にお参りに行き冥福を祈りました、人生ってむなしいな。

帝国歴478年1月1日

オーディン           ノイエ・サンスーシ           テレゼ・フォ  
ンゴルデンバウム

新年になりました。今年こそは良い年でありますようにと大神才

ーデインに祈りました。

さらに元日本人として初日の出を見ながら天照大神に祈願しました。

新年ですので身支度をした後いつもの通り、黒真珠の間で新年パーティーです。

喪中の習慣がないのか或いは帝室としての義務でしょうか、父様は若干思い込んだような顔で笑顔を無理に作って居るようです。

私としては欠席したいのですが義務ですから仕方ありません。いくら転生者でも今の六歳児の精神がメインですので、身近の死にはメンタル面で非常に辛いです。

皆さん王子死産を知っていますが、さすがは貴族神経が凶太いかライバル死んで嬉しいのか、全然平気で談笑してますよね。

兄上は軽いため息を吐きながら談笑に応じています。

マグダ姐さん、（いやねお姉さんと言うより姐さんじゃないかと我ら6人組では呼んでるんですよ）とヒルダお姉さんが来てくれて慰めてくれます、因みに敬語は止めてと言ってるんですが、正規の時には矢張り敬語なんですよね。

「皇女殿下この度はご心中お察しいたします」

「男爵令嬢お心遣い痛み入ります」

「皇女殿下のお心を思うと胸が痛みます」

「伯爵令嬢お心遣い痛み入ります」

取りあえずの社交辞令をして少し離れた所で雑談。普段は敬語なしでお願いしているのです。

「弟さんは残念な結果だったわね」

「死産だそうですね」

「そうなのです、外因的なことを聞いたのですが正真正銘の死産だ

と母から聞きました」

「気を強く持ちなさいね私も出来る限りのことをしますわ」

「私もお手伝いできることはします」

「お姐さん、お姉さんありがとうございます、頑張りますんで今年もよろしくお願いいたします」

「ええ今年もよろしくね」

「今年もよろしくおねがいます」

「そう言えばお姐さん、グリューネワルト伯爵夫人とお友達になつたそうですね」

「ええアンネローゼがみんなから爪弾きにされて気の毒で母性本能を擽られましたわ」

「伯爵夫人はどのようなお方なのですか」

「だいたい原作で知ってるけどね、男爵夫人の見識を聞きたいのがね。」

「私も聞きたいですね」

「彼女は凄く大人しくて物静かで優しく料理も上手よ」

「綺麗な方ですよね」

「そうですね」

「テレゼ様」

「クラちゃんブリちゃんリアちゃんエルちゃんカロちゃん」

「今年もよろしくおねがいます」

「今年もよろしくおねがいます」

ワイワイしながら新年は始まっていったのです。

帝国歴 478 年 1 月 7 日

オーデイン

テレゼ・フォンゴールデ

ンバウム

今日この瞬間こそ待ちに待った時、父様が会いに行けと勧めてくれたのだ全身全霊をかけ力を見せよう。果たして鬼が出るか蛇が出るか、グリーンメルスハウゼン爺さんの裏の顔が有れば正体を見せてもらえるか正念場だ。

オーディン     グリーンメルスハウゼン子爵邸     リヒャルト・  
フォン・グリーンメルスハウゼン

本日テレゼ様と初めて会談する、私が見てきた限りテレゼ様は大器だ。年齢不相応の冷静さ知恵も有り機敏も効き政治経済歴史軍学等に多まれなる興味を引いている。この姿は幼き頃の陛下を彷彿とさせるものじゃ、儂も久々に朝から興奮しておる新たな昇竜を見つけたのかも知れんからな。  
テレゼ様がいらっしやったのお手並みを拝見させて貰いましょうかの。

オーディン     グリーンメルスハウゼン子爵邸     テレゼ・  
フォンゴールデンバウム

「皇女殿下このような老人の元へ行脚頂き名誉この上なき事、誠にありがとうございます」

「グリーンメルスハウゼン子爵この度はお招き頂き誠にありがとうございます  
じます」

「ささどつぞ」

「痛み入ります」

ふむ普段と違う客間に通されたわ秘匿の意味がある訳だね。

「皇女殿下におかれましてはこの老人に何をお聞きに成りたいの  
でしょうか？」

「父様の若き頃の思い出話をして頂きたくて参りました」

「皇帝陛下のお話でございますか」

「そうです」

「皇帝陛下は若かりし頃よりご聡明であらしやりました」

「そうでございますか」

「皇太子時代においても其れは其れはご立派でございました」

「ふむ試してますね、目が面白そうに見えますよ。そろそろ聞きます  
かね。」

「そうですね若き頃は優秀な兄、才気に富む弟の間で無気力凡庸愚  
物として自身を韜晦なさっていたのですからね、その為に町の飲み  
屋の店主に借金を作り皇帝次男が土下座したんですから、天晴れと  
か言いようがありませんよね、其処まで出来るお父様を尊敬して  
おります」

「……殿下」

「言い過ぎですかね。」

「そろそろ相談相手が欲しかったのです、腹を割ってはなせる相手  
が」

「其れが私だと仰るのですか？」

「もちろん、父からグリーンメルスハウゼン子爵へ会いに行けと勸た  
事もあります、宮廷や貴族の噂話や動向を長年にわたりお調べし  
ているのかなんとか」

「さようでございますか」

「そろそろお互い猫をかぶるのは止めませんか」

「……」

「・・・・・・・・」

お互いで睨めっこです

「ふふふふ」

「はははは」

「殿下には負けましたわ」

「勝ちましたね」

「して何をお聞きしたいのですかな」

「グリーンメルスハウゼン子爵貴方は父の影の部門を取り仕切ってますよね」

「はてさて」

「ここへ来ても知らんぷりですか、色々なスキャンダル等を調べてらっしゃるそうですわね」

「ふむ、よう知っておられますな」

「宮廷内で話を聞いていて次第に判りましたよ」

「さて殿下はこの老人に何をさせたいのですか」

「取りあえずは」

「第一に父が華麗に滅べは良いと考えていた帝国再生準備における人材確保」

「第二に帝国内部の叛乱勢力の確定及び内部への浸透」

「第三に叛乱軍に対しての軍とは別の情報組織の整備」

「第四にフェザーン対策」

「第五に皇族の身边警護、私は生まれたときに暗殺されかけてますからね」

「取りあえず今の年齢ではこのぐらいが精一杯でしょう」

「殿下流石ですな。とても6歳には思えない考えです」

「できますか」

「できましよう、陛下よりも殿下の好きにさせよとのお言葉を貰っ

ておりますから」

「グリーンメルスハウゼン子爵此からよろしくお願いいたしますね」

「この老人残りの人生のすべてを殿下に捧げましようぞ」

「今日は有意義な日でした。其れと殿下では無くテレーゼで良いです」

「ではテレーゼ様今宵は良き日でございました、お気おつけて」

「では失礼いたします」

よつしや矢張りグリーンメルスハウゼン子爵はスパイマスターだった原作じゃ其れらしい描写がありありだった物ね、其れを言う訳にはいかなかったけど何とか出来た。父様感謝でございます、此から忙しくなるぞ、人材確保が第一だラインハルトに取られてたまるかこつちが先取りだー！

オーディン      グリンメルスハウゼン子爵邸      リヒャルト・

フォン・グリーンメルスハウゼン

今宵テレーゼ様と話してみても先ほどの感が間違いで無いと身にしてみても判った。

まさにあの才氣韜晦具合正しく陛下の御血を色濃く引いておられる。あれほどとは思わなんだ若干6歳とは未恐ろしいぐらいじゃ。

男児であれば確実に皇帝として中興の祖となれる素質じゃ。

しかし男児で有れば今この世には居ないじゃろう、女子に生まれたのは天の采配としか思えん。

此から短い人生精一杯陛下とテレーゼ様の為に誠心誠意尽くそうぞ。早速明日にでもケスラーと話し合わんといかんの、出来るだけ早く陛下と話もしなければならん。

忙しいが面白い年になりそうじゃ。



## 第十七話 グリンメルスハウゼン子爵（後書き）

第五次イゼルローン攻略戦、エル・ファシルの戦い、帝国領侵攻作戦のプロットは出来てるのに其処まで話が行かない状態、果たしていつになるやら。

第十八話 それぞれの新年（前書き）

亀のような歩みです。

## 第十八話 それぞれの新年

帝国歴478年1月8日

オーディン                      グリンメルスハウゼン子爵邸

「ケスラー大尉来たか」

「閣下お呼びだそうで、本日は何を」

「昨日テレゼ様にお会いしたのじゃ」

「皇女殿下とですな」

「テレゼ様は覗んだ通り、いやそれ以上の逸材だったわ」

「閣下それほどのお方ですか」

「そうよあの年齢であの知謀冷静は陛下以上じゃ、楽しみじゃわ」

「して我々はどの様な対応を」

「我らは全面的にテレゼ様をご支援いたすのじゃ、各リーダーに通達行つうのじゃ」

「はっ、では幼年学校の方はいかが致すのですか？」

「あの者の動向は今まで道理に逐一記録し探るよつにせよ」

「しかし宜しいのですか、あの者の危険な言動を陛下とてお知りでしょうに」

「陛下は知っていて敢えて目を瞑っておられるのじゃ」

「其れは又どの様なお考えで」

「陛下のお考えは追々判るであらう」

「済まぬのケスラーいずれ明かすときも来よう。

「来週テレゼ様と会談するで、ご要望に添った資料を集めよ、そしてケスラー貴官も同伴せい」

「はっ準備を整えます」

「此から益々忙しくなるぞ心せよ」

「はっ」

帝国歴478年1月8日

オーデイン 幼年学校寄宿舎

「キルヒアイス聞いたか」

「何をでしょうかラインハルト様」

「あの男の寵姫が男児を死産したそうだ」

「それはなんとというか」

「キルヒアイス愉快だな、あの男は姉上を奪い取ったのだ、その報いに子を取られたのだから」

「ラインハルト様・・・」

「子だけではない、いずれあの者のすべてを奪い取り惨めな死を与えてやるう」

「ラインハルト様お声が聞こえてしまいます」

「キルヒアイスは心配性だな」

「ラインハルト様」

帝国歴478年1月8日

オーデイン ノイエ・サンサーシ グリユーネワルト伯爵邸 ア  
ンネローゼ・フォン・グリユーネワルト

新しい年が始まり私がここへ来て最初の新年でしたね、去年までならラインハルトとジークが居てくれて楽しい年明けでしたのに・・・  
・ラインハルトやジークは風邪など牽いていないでしょうか心配です、けれどラインハルトやジークを呼ぶ訳にもいきませんし、マゲ

ダレーナとドロテアとお茶会でもしましょう。

帝国歴478年1月8日

オーディン ノイエ・サンスーシ ベーネミュンデ侯爵邸      テ  
レーゼ・フォン・ゴールデンバウム

昨日のグリーンメルスハウゼン爺さんとの会談で全面的な支援を約束して貰い一先ず安心です。

来週も会談しその時に必要な人材組織資金等の大まかな流れを決めるつもりですので、人材については原作知識をフル動員しながら転生者とばれぬように、如何にも偶然を装って決めていかないと危険ですね。

ラインハルト元帥府の主要メンバーとかは確実に引き込まないと駄目ですね、どうやら父様はラインハルトにも期待しておられる様なのである程度まで、ラインハルトが出世するのは此方も黙認ですね。

取りあえずはミッターマイヤーとロイエンタール、ミュラー、メックリンガー、ケスラー、アイゼナツハ、ケンプ、ファーレンハイト、ルッツ、ワーレン、ビッテンフェルト辺りか。Mrレンネンは要らねー、義眼はうちの家憎んでるし猛毒だから生理的に拒否したい、そうそう忘れちゃ行けないメルカッツ、陸戦じゃ原始人かリユーンブルクだけど危険が一杯なんだよな、閣僚じゃシルヴァーベルヒ、リヒター、ブラツケ、オスマイヤー、マインホフ、ブルツクドルフ辺りを引き抜きたいな、そうなると領土がないと実験不可能だな、どっかの星貰えないかな。

バイエルラインやベルゲングリューンとかも超必要だし補給のベテランも絶対要るな、けど原作じゃ同盟のキャゼル又先輩かシンクレア・ゼップだったけか？しか思いつかんぞ。  
ともかく来週の話し合いからはじめなきゃ駄目だね。

帝国歴478年1月8日

オーディン 帝国軍士官学校  
イエンタール

オスカー・フォン・ロ

新年最初の授業が終わった、人の噂も七十五日と過去の偉人は言ったそうだが其れは嘘だと断言できる。既に1年半経つが未だに思いついたくもないあの事件の為に親衛隊からは目の敵にされ、女どもからも敬遠されまくっているのだから堪らん状態だ。マールバッハの伯父も相変わらず無茶振りをしてくるし、最近はこの娘俺の従妹に当たるリヒャルダと結婚させ跡継ぎにしようと企んでいるらしい。皇帝陛下の愛娘の皇女殿下の覚え目出度い若手士官としての名声を望んでいるようだ。

冗談じゃないあの娘のお陰で散々だったんだ、あれは俺にとっての疫病神だ災厄の女王と言っても良いだろう、あと半年か早く卒業したい卒業して一刻も早くオーディンから離れたい離れるんだ！！

第十九話 ロリとの遭遇（前書き）

続きは第二十話です。

これから仕事行ってきます。

## 第十九話　ロリとの遭遇

帝国歴478年1月14日

オーディン　　グリーンメルスハウゼン子爵邸  
フォンゴールドンバウム  
テレーゼ・

グリーンメルス爺様との会談から、一週間待ちに待ちましたいよいよ今日から爺さん達と悪巧みの開始です。

爺様の館へ向かうといつもの小部屋へ案内されました。相変わらずの日向ぼっこ提督とはとても言えないシャッキリした姿勢で迎えてくれます。

「テレーゼ様よくお越し下さいました」

「グリーンメルスハウゼン子爵今日もよろしくお願いしますね」

爺様は考えながら一言。

「グリーンメルスハウゼンでは長すぎますな、テレーゼ様何か呼び方がありますかな？」

ふむ頭の回転とかも試されていますね流石です。パット考え。

「では、ラテン語で耳を意味するアウリスではいかかでしょうか？  
爺様目を細めて。」

「ほう、博識ですな良い響きです、ではアウリスとお呼び下さい」

「よろしく願いますね、アウリス殿」

「アウリスと呼び捨てで構いませんぞ」

「教えを請うのに呼び捨てでは余りに失礼かと」

爺様はふむふむと満足そうにうなずいている。

「判りました私がテレーゼ様を一人前に育て終わったとき呼び捨て

にして貰いますぞ」

ニヤニヤしてますね、ものすごく楽しそうだ。

「はいよろしくお願ひします、アウリス殿。それと私に様付けも要らないのですが」

「流石に其れはご勘弁を」

「駄目ですか」

「其処までは儂が持ちませんわ」

「判りました其れはあきらめます」

「御意」

「御意も止めましょう、はいか判りましたで良いでしょう」

「判りました」

爺様も納得してくれたらしく、終始にこやかに進みますね。

爺様が身を正して真剣な顔をして此方へ向かい直した。

「テレーゼ様先週頼まれました人材に関するリストで御座いますが帝国臣民250億の中からですから中々調べが進みません」

「其れはそうですね其処まで無茶は申しません」

嬉しそうですね又試しましたが、食えない爺様ですね、まあ其れが其れで楽しいんですがね。

「軍人の中でなら今幼年学校ですが非常に有能な人物がおりますぞニヤニヤしてますね、判りますよ金と赤でしょ、判つてて言ってるな、けど金は知ってるが赤は知らないふりをしないかね。」

「ほう其れはどんな人物ですか、私の知っている幼年学校生だとミユッケンベルガーとフレーゲルしか知りませんが、ミユッケンベルガーは期待できそうですがフレーゲルはねー」

「いえいえグリューネワルト伯爵夫人の弟です」

全く危険物を使いこなせと言うのですかね、いやからかってるんで

すね、ニヤニヤ。

「ああラインハルトですね、父様と一緒に会いましたよ。父様を見るあの目あの顔あの内面から出る憎悪がよく見えました。能力的には非常に優秀に見えますね、けど彼は猛毒ですね今の私には使いこなせないですね。」

今は様子見で良いでしょう父様の様にね」  
爺様其処までと言う顔をしてみるね、爺様クルーじゃなきや駄目だよフフ。

「そうなりますと優秀な人材については部下にリストを作らせておきますので、その者呼んで宜しいでしょうか」

「無論ですその様にご苦労して頂いている部下の方に会わないのは失礼に当たりますので是非お会いしたいです」

「判りました」

そうすると爺様はインターホンで誰かを呼んでます、暫くするとノックがされて20代中盤ぐらいの士官が入ってきました。

「閣下ケスラー大尉入ります」

「うむ、ケスラー大尉よう来た、テレーゼ皇女殿下じゃ、殿下私の部下で取り纏めをしているケスラーと申します、ケスラー皇女殿下にご挨拶を」

おい来ましたよーケスラーです、ロリですよロリとの遭遇ですよ、ケスラーにしては私はドストライクゾーンです。

「皇女殿下ご尊顔を賜り恐悦至極で御座います、小官グリーンメルスハウゼン閣下にお仕えする、ウルリツヒ・ケスラー大尉と申します。元来平民たる臣が皇女殿下に直接ご挨拶するなど不敬の極みで御座いますが平にご容赦をお願いいたします」

なるほど爺様ケスラーも出汁に使ってるな。ケスラーも気の毒に此処は助けてあげましょう、私の中ではケスラーの信頼度凄く高いから、仲良くしたいいな。

「ケスラー大尉その様にかしこまらなくても構いません、私達は同士です皇族、貴族、平民の差など何がありません。同じ赤い血の流れた人間じゃないですか、そんなへりくだった挨拶は無用ですよ。私のことはテレゼで良いですよ」

ケスラー驚いてますそりやそうだよね、六歳児の言うことじゃないし。

「その様な恐れ多いことを」

「返って敬語を使われる方が気になりますよ」

「ケスラーよテレゼ様が良いとっしゃっておるのじゃテレゼ様とお呼びすればよい」

「御意」

「じゃあ改めてケスラー大尉テレゼ・フォン・ゴールデンバウムです此からよろしく願いますね」

「テレゼ様ウルリツヒ・ケスラー大尉と申します、此よりテレゼ様にお仕えし足します、どうぞよろしく願います」

「よいの此で顔合わせは終了じゃな。早速話し合いに入るかの」

「よろしく願いますね」

「判りました」

「ケスラー資料を」

「御意」

## 第二十話 人材収集計画

帝国歴478年1月14日

オーディン     グリーンメルスハウゼン子爵邸     リヒャルト・  
フォン・グリーンメルスハウゼン

テレゼ様が本日いらっしゃる、どの様におもてなしするか楽しみじゃな。  
いらっしゃったようじゃ、シャキツとした姿勢と眼光でお迎えじやな。

「テレゼ様よくお越し下さいました」

「グリーンメルスハウゼン子爵今日もよろしくお願いしますね」

ほうほう驚かん、流石じゃちと試してみるかの。

「グリーンメルスハウゼンでは長すぎますな、テレゼ様何か呼び方がありますかな？」

「では、ラテン語で耳を意味するアウリスではいかかでしょうか？  
ほう速攻で返した来たのしかもラテン語とは流石じゃ。」

「ほう、博識ですな良い響きです、ではアウリスとお呼び下さい」

「よろしく願いますね、アウリス殿」

「アウリスと呼び捨てで構いませんぞ」

「教えを請うのに呼び捨てでは余りに失礼かと」

立派じゃな師を尊ぶ心、普通はとても出せん。

「判りました私がテレゼ様を一人前に育て終わったとき呼び捨て

にして貰いますぞ」

嬉しくてついつい顔にでしてしまうの。

「はいよろしくお願いします、アウリス殿。それと私に様付けも要らないのですが」

さて本題に入るかの。

「テレーゼ様先週頼まりました人材に関するリストで御座いますが帝国臣民250億の中からですから中々調べが進みません」

「其れはそうです其処まで無茶は申しません」

やはりちゃんと判つてらっしゃる、人材としてあの者の話をして見るかの一度お会いしておるし、どの程度の人物眼があるかの。

「軍人の中でなら今幼年学校ですが非常に有能な人物がおりますぞ」

「ほう其れはどんな人物ですか、私の知っている幼年学校生だとミユッケンベルガーとフレーゲルしか知りませんが、ミユッケンベルガーは期待できそうですがフレーゲルはねー」

テレーゼ様すつとぼけておりますな。

「いえいえグリューネワルト伯爵夫人の弟です」

ニヤツとしましたな判つてらっしゃる。

「ああラインハルトですね、父様と一緒に会いましたよ。父様を見るあの目の顔あの内面から出る憎悪がよく見えました。

能力的には非常に優秀に見えますね、けど彼は猛毒ですね今の私には使いこなせないですね。

今は様子見で良いでしょう父様の様にね」

ほう僅かな会見で此処まで人物鑑定をするとは、儂でもかなわんなそろそろケスラーを呼ぶかの。

「そうなりますと優秀な人材については部下にリストを作らせてお

りますので、その者を呼んで宜しいでしょうか」

「無論ですその様にご苦労して頂いている部下の方に会わないのは失礼に当たりますので是非お会いしたいです」

受け答えも完璧じゃな、しかもケスラーに対しての受け答えも皇族貴族平民の身分差も考慮しない大らかさ、此こそ王者のカリスマじやものすごく楽しみになってきたの。

オーディン

グリーンメルスハウゼン子爵邸

ウルリッ

ヒ・ケスラー

初めて皇女殿下にお会いし驚いた6歳なのにあの威厳カリスマ聡明さ末が楽しみな女傑と成るはずだ、私がへりくだって挨拶したとき、同士だからと名前で呼んでくれと言われ驚いた。

しかも身分に躊躇しない大胆さ此は本物だ、これほど嬉しいことはないだろうこれからが楽しみだ。  
閣下と共にお仕えに足るお方だ。

オーディン

グリーンメルスハウゼン子爵邸

「さて其れでは今回の趣旨を説明します。

此から数年をかけて銀河帝国の病巣を取り除く外科手術と考えて下さい。

その為の優秀な人材がまず必要となります。

そこで人材のリスト作成をお願いします」

「諒解しました」

「まず忠誠心な厚い優秀な軍人を此は宇宙艦隊司令官候補、幕僚参

謀候補に当てる艦隊派。

的確な作戦を立てられる作戦派。

補給担当、後方支援等の後方派。

陸戦部隊。

また現在の技術部主流から外れた外された所謂勢力争いで負けた組などから優秀な人材を密かに秘密研究所へ移転させる。

帝国内、叛徒内、フェザーン内に作るスパイ組織の構成員。

政治に関しては、今までの政治に囚われない斬新な政策を考えられる者。

社会整備、インフラ、流通、経済等に詳しい者。

尚門閥貴族の紐付きではなく出来る限り下級貴族平民等から人材を集めてる。

こんな所ですね」

爺様もケスラーも驚いていますね。とても六歳児が考える物じゃないと、仕方がないですよ死にたくないですから、このまま座していればラインハルトに滅ぼされる可能性が大きいのですから。

爺さんとケスラーが頷き有ってから返事が来たね。

「テレーゼ様のご指摘誠に理にかなっております、全力をかけて行動に移します」

「よろしく願いますね」

「判りました」

「其れでは私の方も色々な所を廻り此と思う人材をピックアップします」

「その者達の調査はお任せあれ」

「其れでは失礼するわね」

「はっお気御付けてお帰り下さい」



第二十一話 黒いテレゼ（前書き）

黒いテレゼ 参上です

## 第二十一話 黒いテレエ

帝国歴478年4月12日

オーディン            グリンメルスハウゼン子爵邸            テレエ  
ゼ・フォン・ゴールデンバウム

秘密会議開始から4ヶ月日々精進の毎日です。

2月の誕生日は去年のような派手な物ではなく知り合いを招待して行いましたよ、我ら6人衆母娘にマグダ姐さん母娘、ヒルダ姉さん母娘とか若干名です、だってフレীগエルなんか来たら嫌じゃないですか。

そんな訳で男子禁制状態でパーティーしましたよ。

最近お母様はスツカリ落ち着かれて、にこやかで子煩悩なお母さん状態です。

原作やOVA板のベネミュンデ侯爵夫人と全く別人状態ですよ。お父様もよくおいでになり一緒にオペラ鑑賞とかに出かけていきます。

まあOVAで見てもお父様はお母様を巻き込みたくない為に疎遠にしていた訳ですから、巻き込む心配が無くなりつつあるので安心してきているでしょうね。

逆にアンネローゼへのお渡りが非常に少なく宮廷では無理矢理押し付けられたから気に入らないと言う噂がまことしやかに流れていきます。

アンネローゼが可哀想に感じましたね、きっとラインハルトは怒り心頭でしょうね。

姉上を奪った上に馬鹿にしていると。益々憎悪が増えそうです。

へたすれば、ベーネミュンデ侯爵夫人事件じゃなくグリユーネワルト伯爵夫人事件が起こるかも知れないですね。

アンネローゼがしなくても、お付きの者が暴発するかも知れない。そんなことはさせませんがね。

毎日お勉強と悪巧みと各種行事に参加とか大変です、お友達や姐さん達との付き合いも非常に大事ですから、なんと言っても癒されません。特にエルちゃんが可愛いです萌えますよ。

ともかくオーバークですけど死にたくないので頑張ってます。どごそのニート侍の【働きたくないでござる】じゃなく死にたくないでござるですね。

7月には士官学校の卒業式に行く予定を立てています、待ってるよロイエンタールふふふ。

9月か10月ぐらいに同盟軍がイゼルローンへ侵攻する可能性があるのでその対策も立てねば行けないところです。

そして今日も定期連絡会で、爺様とケスラーとで話し合いです。相変わらず爺様はニコニコ、ケスラーは考えてる顔です。

まずは爺様が切り出して。

「テレーゼ様今回の趣旨はいかがしますかの」

「まず、技術的計画を述べますので後で照査して下さい。なお此から述べる計画は研究所が出来た段階で行う予定です。研究所ですが明からさまに研究所としたらばれますのでダミーを作ります。」

「テレーゼ様なぜ即在の技術部では駄目なのですか」  
ケスラー其処が肝心だよね。

「言ってみれば現在の技術部はシャフト大将の独壇場です。」

シャフト大将が優秀ならば構わないのですが彼は政治力で今の地位を築いたそうです。

さらに自分の地位を脅かす可能性のある人物を地方や前線に飛ばし自分の子分やイエスマン自分より劣る者で技術部を固めています。其れでは研究が出来ませんし横やりが入る可能性が多きく情報漏れが懸念されます」

「確かにシャフト大将には良い噂は聞きませんな」

「さようじゃの」

「そこで秘密研究所です。研究所は地方星域の僻地に作り例えば軍用缶詰工場とかに化けさせます、其処へ当該者達を職員として配置し研究させます、こうすればシャフト達は左遷されたと考えるでしょう」

「いい手ですね」

「そこで研究して貰うのは次のような事です」  
ケスラーメモを取ってますね。

「第一に叛徒の戦艦か巡航艦を数隻捕獲し艦の運行用ソフトを解析しそのデータを我が軍の物と比べて下さい、此は敵の方が運行用ソフトの出来が良いとの噂が有る為です」

実際同盟軍のソフトの方が優れてるんだよね。

「第二にそれに関するのですが艦船の自動操縦システムの強化と自動砲撃システムの開発です」

「それはどう言うことで？」

「まあ敵に突っ込ませるってかんじですかね」

シトレがイゼルローンに無人艦突っ込ませたしね此方もお返しで。

「あとは気がついたら追々研究目標に入れていきましょう」

「判りました」  
爺様とケスラーも頷いてます。

「今度は人口についてです。取りあえず質問は後でまとめて答えますのでよろしく。」

まず政治犯及び共和主義者の大まかな罪状及び人数、教育程度、思想的な過激度、労働条件、家族、健康状態そしてどの星系のどの星に何人居るか、その星の宇宙港へ何日で集められるか。  
その星からイゼルローンへ何日で到着するかを三年ごと位に資料を集めて下さい」

「次に殺人、強姦、重過失傷害、放火等の重犯罪者のリストと収監されている監獄そして集めてイゼルローンまで何日で到着するかを同じく三年ごとに資料を集めて下さい」

「次に叛徒から連れてきて農奴と成っている者達の居場所、そして同じくイゼルローンへ何日で到着するかを三年ごとに資料を集めて下さい」

「また叛徒軍俘虜の収容所と其処にいる人数及び待遇そしてイゼルローンへ何日で到着するかを三年ごとに資料を集めて下さい。取りあえずは以上ですね」

2人とも不思議がってますね。ケスラーが質問してきますね。

「テレゼ様資料集めは可能ですが、何に利用なさるのですか？」  
秘中の秘なので今は未だ言えないからお茶を濁しておきますか。

「いずれ叛徒共との戦いと我が軍の捕虜に関しての手に使おうんですよ」

「そうですね」

「それと我が軍の捕虜達がどこで何をしているか、待遇等はどんな

のかを調べて下さい、我が国は捕虜に優しくありませんから【生き  
て虜囚の恥を知り死して虜囚の恥を知らず】ですから彼らに慰問袋  
を送りたいんですよ、頑張つて下さい決して見捨てませんと勇気を  
与えたいんです」

「テレーゼ様なんとお優しいことを」

いや気の毒なものも有るんだけど、絶望の淵にある捕虜達が後々ライ  
ンハルトによつて帰国できるんだけど、その時少しでもラインハル  
トに着く人間を減らしたいのも有るんだよね。

それにエコニア捕虜収容所じゃ不正が行われていたからね、慰問袋  
に入れる予定の品物もピンハネするんじゃないかと、そうすれば同  
盟の捕虜虐待の証拠になるじゃん。

「所でこの組織の資金源を考えたんですが、吝嗇だつたお爺さまの  
貯めた資金じゃ無いんですか？」

爺様一寸驚いたなビンゴか。

「お爺さまが山ほど蓄えた資金でお父様が帝位継いだとき財政赤字  
が綺麗に無くなつたそうですよね。

そのあと相当余つた資金を、お父様は遊興や建物建築等で使い果た  
したと聞いておりますが、其れ嘘でしょ？」

「はっ気づかれましたか、流石でございますな、その通りです。相  
当量を増しで請求しましてな、その水増し分を元に色々増やして  
きました」

「では研究所とかの資金も大丈夫ですね」

「国家予算の数十倍の資金はあります」

「なるほどね」

推理が当たつたね。

オーディン      グリンメルスハウゼン子爵邸      リヒヤルト・  
フォン・グリンメルスハウゼン

テレーゼ様がお帰りになったあとケスラーと今日のことを話し合っ  
た。

「テレーゼ様の勘の良さとアイデアは誠に驚くことばかりじゃ」

「まことに、資金源の事など推測で当ててしまいましたから」

「そうよなあ時は些か慌てたわ」

「技術に関しての造形やシャフトの危うさなども優れた観測です」

「ふむそうじやの捕虜に関する御優しさも好ましいの」

「まことに捕虜もそうですが、判らないのは政治犯等ですね」

「ほんに判らんの、叛徒との戦いで何に使うのやら」

「テレーゼ様の事です考えが有つてのことでしょう」

「そうじやの」

「ケスラー今日のご苦労であった」

「御意」

第二十一話 黒いテレゼ（後書き）

【G夫人がB夫人に害意を抱いている】て匿名の手紙が届いたりしてw

**第二十二話 みんなで企めば怖くない！（前書き）**

卒業式は二十三話になりました。

## 第二十二話 みんなで企めば怖くない！

帝国歴478年5月10日

オーディン     グリーンメルスハウゼン子爵邸     テレーゼ・  
フォン・ゴールデンバウム

本日も連絡会議、結構頻繁に此処へ来ると怪しまれるのでアリバイ作りが大変な今日この頃です。

いつものように爺様とケスラーが見守る中答弁開始です。

「テレーゼ様前回ご依頼を受けました研究所の件ですが来年度予算に潜り込ませる様に手配をしました」

「ご苦労様です。これで何とかかなりそうですね。」

所で叛徒には選挙という物があるそうですね、その時は叛徒が好戦的になるとか、以前の資料を見たのですがどうやら今年がその年に当たるようです」

ケスラーが気付いたみたいですね。

「確かにその様な行動パターンが以前言われたことがありましたな。調べてみる価値はありそうですね。し警戒しその兆候があるなら迎撃の準備をしないとだめですね」

「お父様や軍部への根回しはよろしくお願いしますね。今はまだ他人に正体をさらすことは避けたいですからね」

「たしかのそうじゃのテレーゼ様のお姿は晒してはならんの、儂が陛下にお伝えしよう」

「では軍部のほうが小官が手配りいたします」

「あとですね、このことを余り広く知られると叛徒やその様な確率を信じていない方々がなにやら騒ぎ出す可能性があるので、必要最小限でお願いします」

「確かにそうです」

「そうじゃの」

「あとですね、この館に士官学校に有るような戦術シミュレーターを置けませんか？」

「なにをなさるのですかな」

「色々閃いた戦法があるので実際に試してみたいのですよ」

「ほう其れは楽しみですな。ケスラー準備出来るかの？」

「備品の発注が終わっていますので今年中に配備するのは疑念を呼びます。」

「申し訳ございませんが、来年であれば損耗分として潜り込ませられます」

「仕方有りませんね。それでは来年まで我慢しましょう、其れまではアイデアとして暖めて置きます」

ケスラーが本当に申し訳なさそうに頭を下げます。

「あと優秀な人材を発見しました」

「ほうテレーゼ様のお眼鏡に叶う相手がありましたか」

「どの様な人材ですか」

2人とも興味津々です。

「今年士官学校を卒業する生徒ですが、オスカー・フォン・ロイエンタール、フリッツ・ヨーゼフ・ビッテンフェルト、アウグスト・ザムエル・ワーレンが二年前に士官学校へ視察を行ったとき優秀な人材かと思いました」

「なるほど、では早速三名を調べましょう」

オーディン      グリンメルスハウゼン子爵邸      リヒャルト・  
フォン・グリンメルスハウゼン

「相変わらずテレゼ様には驚かさせられるばかりじゃの」  
「まことに」

「叛徒の攻勢の件頼んだぞ」  
「御意」

帝国歴478年5月19日

オーディン      ノイエ・サンスーシ      小部屋      テレ  
ゼ・フォン・ゴルデンバウム

今日はお父様をお願いしに来ました。お父様は終始にこやかです。  
「テレゼやグリンメルスより聞いたが、可能性が高いのじゃな」  
「はいお父様過去のデータを照査した結果かなりの確率で攻撃が  
来ます」

お父様考えながら。

「そうかでは軍に準備命令を出さねば成らん、しかし外れた場合  
はどうするのじゃ」

「一つの案なのですが、迎撃艦隊に今期卒業の新規士官を研修とし  
て乗せて遠洋航海とすれば幾らでも準備が出来ます」

「つまりは迎撃艦隊は無く訓練艦隊だとして敵を欺くのか」

「そうです。敵と予算と信じない者達を欺きます」

お父様楽しそうです、普段の枯れた雰囲気から目が鋭くなりますね。  
流石我が師匠、天下第一の猫かぶりですね。

「その為に卒業生を遠洋航海に出かけさせる様に勅命を出して頂きたいのですよ、前例がないので現場が渋ると思うのです」

「父も使うかテレエゼはハハハ」

お父様凄く楽しそうです。

「ええ東洋の諺に【立つてる者は親でも使えと】というのがありませんから、お父様もお願ひしますね」

「よいよい儂は娘には甘いのじゃからなハハハ」

「それとお父様、士官学校の卒業式に参加したいのですが良いでしょうか？」

「よいよいどうゆう気じゃな？」

「士官学校に顔を出しておきたいのと、今年度卒業生に原石が居るんですよ」

「ほほ其れはあの時優勝した者かの？」

「はいあの者も入っています但他にも居りますので」

「よいよい行ってまいるがよい、エーレンベルクには儂が伝えておこう」

「お父様、ありがとうございます」

オーディン      ノイエ・サンスーシ      小部屋      フリー

ドリヒ四世

本日娘がお願いに来た、儂は娘が可愛くてしょうがないからの。グリーンメルスの言っておった同盟の事じゃった。

聞くごとに此はと思う事ばかりじゃった。

弱冠七歳でこの知謀じゃ儂など足元にも及ばん、儂は逃げて居ったからな。

彼の者に会って儂の願ひを叶えてくれると思ったが、それ以上の資

質じゃ。

今は只テレゼが儂の期待じゃ、彼の者には悪いがテレゼの礎に成ってもらおうかの。

テレゼが彼の者をどう扱うか楽しみじゃ、其れまでは彼の者の行動は目を瞑る事にしようぞ。

さて近いうちに三長官を呼んで指示しなければならぬな、これは楽しみじゃな。

帝国歴478年5月28日

オーディン　　グリンメルスハウゼン子爵邸  
ゼ・フォン・ゴールデンバウム

テレー

ロイエンタール卒業まで一ヶ月一寸となりました。

まずはケスラーが3人の調査をしてきたそうです。

「テレゼ様3人の調査を致しましたが、ビットンフェルト、ワーレンは素行問題等は有りません。

些かビットンフェルトが口が悪く短気なところをのぞけばですが。ワーレンに関しては非常に優秀です冷静沈着ですし。

しかしロイエンタールは素行が悪すぎます、女癖が悪く何度もトラブル等を起こしています。

あのような者が良いのでしょうか？」

「ケスラー確かに女癖が悪いのは良くないですが其れを上回る資質が有るのでから、一概に切り捨てることはしないですよ」

ケスラー本気で心配してるみたいだね。

「しかしです。あの者の噂ではロリエントールと呼ばれており、恐れ多くもテレゼ様の唇を奪ったと言うではないですか。その様な不埒で不敬な者をテレゼ様のおそばに置く訳にはいきません」

「ああその噂ですか、それは武術優勝のご褒美にほつぺたに軽くキスしただけですよ。」

其処まで噂が大きくなっていたとは、ビックリですよ。」

クッククックワーハツハ。ロリエントールだつて可笑しいー吹き出しちゃうよ！

ケスラーが怪訝な顔するまえに我慢我慢、家帰ってから笑おう。

「そうですかしかし士官学校ではロリエントール事件として有名だそうです。」

今年の入校式にテレゼ様が呼ばれなかったのはその為だそうです。「なるほど迷惑をかけた訳ですね、しかしどんな事件なのですか？」

「テレゼ様言い難いのですが、テレゼ様が士官学校へお行かれた時余りの可愛さに生徒達がファンクラブを創立したのです。」

その総数は全校生徒の八割という状態になりました。

およそ16000人です、その時テレゼ様がロリエントールにキスをしたと行うことで学校中が彼に嫉妬し大騒ぎと成ったのです。

それ以来彼はロリエントールと言われているのです。」

うわー気の毒ですね、ロリエントールだからかパーティーで余所余所しかつたのは、けど女の敵には少しは反省して貰った方が良かったと言つことにしましょう。」

「けど能力に問題無ければ良いのですよ、追々修正していけば良い訳ですよ。」

「士官学校の評判ではテレゼ様の侍従武官と云う噂が流れております。」

「良いんじゃない噂は噂で、その時にならないと決めませんよ。」  
本当は決めてるんだけどね。

「ケスラーご苦労様です」

「御意」

「御意はいいのに」

「はっ」

第二十二話 みんなで企めば怖くない！（後書き）

卒業式書こうとしたらそこまで行けませんでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3863x/>

---

銀河英雄伝説～ラインハルトに負けません

2011年10月26日04時03分発行